

撲糸文土器文化における石器群の一様相

——スタンプ形石器と三角錐形石器を中心として——

石 坂 茂・岩 崎 泰 一

1 はじめに

縄文時代の草創期後半に位置する撲糸文土器はほぼ関東地方という極めて限定された地域に存在するものであるが、近年の著しい資料の集積に伴って、遺跡確認数の増加や竪穴住居の検出、そして貝塚の形成などの確認を含めて、その文化内容が明確に把握されつつある。土器の編年学的研究を中心に進められてきた当該期研究のなかで、住居などの遺構や良好な包含層からの出土資料の増加に伴い、これまであまり問題にされることの少なかった石器についても個別的な機能・用途の研究をはじめ、各遺跡における石器組成の時・空間的な地域性の把握やその組成の変遷過程を分析することによって生産活動の変遷および地域性を明らかにしようとする試みもなされてきている。

最近、群馬県内でも撲糸文土器とそれに伴う石器群の発掘調査による資料が増加してきており、これまで多摩丘陵や武藏野台地を中心に語られてきた撲糸文土器文化とは、やや異なる様相をもつことがその石器組成からも窺えるようになってきた。特に、多摩丘陵・武藏野台地の地域を中心に多出するスタンプ形石器と、北関東地方の利根川上流域や那珂川上流域の台地・丘陵部に分布する三角錐形石器とのあり方には象徴的な差異をみいだすことができる。

スタンプ形石器については、小田静夫氏の論考に詳しく、学史的にみて従来「凡字形石器」と呼称されてきたものをその一形態として包括した内容を持つものであることや、機能・用途およびその出現と消長についても明らかにされている。⁽¹⁾ それによれば、スタンプ形石器は「偏平ないし棒状の礫を用いてその礫を半割するように折り取り、打割された平坦な折断部を底面とした石器」で、底面の摩耗の状態から「打割された底面平坦部を主使用面として、側縁の括れ部を手で握り、植物質等のあまり固くない物質をたたいた」という機能・用途が推定されている。また、時期的には「稻荷台式新・稻荷原式古」から無文土器群各型式までの撲糸文土器後半期に伴出するものとされている。

一方、三角錐形石器については、栗原文蔵氏が栃木県大田原市頭無遺跡出土の3点の石器について、「凡字形石器」という名称で縄文時代中期後半の北関東地方を中心とした地域に存在する石器として紹介されたのを嚆矢とする。⁽²⁾ 同氏はこの石器の特徴を「平坦な基部と、やや尖った先端からなっており、断面は三角形で基本的な形は三角錐様のものとみることが出来る。基部は一度ないし数度の打撃によって平坦に作られており、胴部から先端は三方から整形されている」ととらえ稜線部分を機能部とする石器と考えている。その後は資料的制約もあり、スタンプ形石器と同様に論考をみないが、1980年に海老原郁夫・福田定信・桜岡正信氏らによって同じく栃木県に存

在する同種の石器について、形態分類や機能・用途を含めた論考が行われる。⁽³⁾ 同氏らは栗原氏が「基部」とした平坦な部位を「頭部」と呼びかえ、この部位を主機能部としてハンマー的な使用を想定しているが、同時に「前面と腹面とのなす角度は60~70度である事例が多いことから、水平面に対応する機能としては若干の疑惑がある」とし、必ずしもその機能的位置付けは明確にされなかった。また、使用痕をもつものが少ないとからその対象物を「叩打衝撃の弱い肉・毛皮・木の皮・草の繊維・粘土などであろうか」とし、帰属時期については、「縄文中期所産の石器の一種として取り扱って差し支えないが、所産の時期は縄文中期に限定されない」としている。この「凡字形石器」は、スタンプ形石器の一形態としての凡字形石器とは異なるものであり、小田氏は改めて栗原氏が当初考えた「三角錐形石器」の名称をあてている。しかし、小田氏もこの石器の帰属時期については何もふれておらず、最近まで「北関東の中期にひとつの盛期をもつことは確実である」とみられてきた。⁽⁴⁾

そうしたなかで、1983年に埼玉県宮代町前原遺跡の報告書が刊行され、三角錐形石器がスタンプ形石器とともに撫糸文土器文化の後半に伴う特徴的な石器であることがはじめて論じられる⁽⁵⁾のである。同報文中で西井幸雄氏は、稻荷台式の古手から稻荷原式の終末にかけての撫糸文土器群とともに出土した三角錐形石器を体部の整形加工およびスタンプ形石器の打割面に相当する部位の加工の状態より4形態に分類し、打割面の摩耗痕が認められないことからスタンプ形石器とは「機能上の区分があるのかもしれない」としながらも、形態的に「スタンプ形石器と三角錐形石器は多くの点で共通している。そのため、将来においては三角錐形石器はスタンプ形石器の亜形態として取り入れられる可能性がある」として両石器の類似性を指摘した。また、埼玉県前原遺跡以外に同県東山遺跡・北坂遺跡や群馬県和田遺跡、茨城県伏見遺跡（2次）でも後半期の撫糸文土器に三角錐形石器が伴出していることをとり上げ、「三角錐形石器は関東平野北部に分布し、押型文土器と撫糸文土器の対峙する地域に分布しながら、撫糸文文化圏の内部に存在するものである」と論じている。

西井氏の論考の後、三角錐形石器の底面部（スタンプ形石器の分割面に相当）にもスタンプ形石器と同様の明瞭な摩耗痕をもつものが存在することが群馬県昭和村中棚遺跡の事例で明らかとなり、機能的にスタンプ形石器と類似する可能性がより濃厚となったのである。しかし、かつて石坂が荒砥北原遺跡の報文中で若干ふれたように、⁽⁶⁾ 整形加工・石器石材の選択・分布等の面からみれば、両石器には大きな差異が存在し、機能的な側面での類似性が必ずしも用途を含めた同一性を意味しない様相も認められるのである。⁽⁷⁾

本稿では、これまで分析不充分であったスタンプ形石器と三角錐形石器の差異を、石器製作技術、石材選択、分布、およびその出現期と消長などの面から再検討し、更に、スタンプ形石器と三角錐形石器に伴う石器組成の様相を把握することによって、両石器が撫糸文土器文化のなかでどのような地域性を形成しているのかを分析してみたい。

（石坂）

2 三角錐形石器およびスタンプ形石器の諸形態

(1) 形態分類

三角錐形石器 三角錐形石器は、三角錐状ないし四角錐状を呈する形態観と側面整形および主機能部とみられる底面部整形により概念づけられる石器である。その典型的な事例とみられるI類と、これにはずれるいわば三角錐形石器の周辺的な存在とみられるII類が存在している。三角錐形石器はその加工量の多さから素材となる礫形状を明らかにすることが困難であるが、形態上の特徴および礫の形状を想定し、分類・検討をおこなった。なお、石器形状と加工部位に基づき存在の予想される諸形態を網羅的に設定することを検討したが、分類が多岐にわたりその実態が不鮮明になることをさけるため、ここではその大枠を呈示する。

I類 多くの場合、平坦な礫表皮が石器裏面として用意されるほか、器体の全面に丁寧な整形加工が施される。側面整形は石器裏面側の平坦な礫表皮から同一方向に左右両側面とも丁寧な整形加工が施されることが多い。断面形は三角形ないしは四角形を基調とする。まれに、広く平坦な剥離面が石器裏面部として平坦な礫表皮にかわって用いられることがある。底面部と石器裏面のなす角度（底面部傾斜角）の相違により2種に細分される。（第1図）

- a：底面部傾斜角が90°前後を示すもので、底面整形は石器裏面側の平坦な礫表皮から同一方向に施される場合と、周辺部から求心的に施される場合とが認められる。（1・3）
- b：底面部傾斜角が60°前後を示すもので、底面整形は石器裏面側の平坦な礫表皮から同一方向に施される。（2・4）

II類 棒状礫あるいは偏平礫を素材とする。器体の側面整形を施す部位に多様性が認められる。

底面部と石器裏面のなす角度（底面部傾斜角）の相違により2種に細分される。（第2図）

- a：底面部傾斜角が90°前後を示すもので、底面整形は石器裏面側の平坦な礫表皮から同一方向に施される場合と、周辺部から求心的に施される場合とが認められる。（1～3）
- b：底面部傾斜角が60°前後を示すもので、底面整形は石器裏面側の平坦な礫表皮から同一方向に施される。（4）

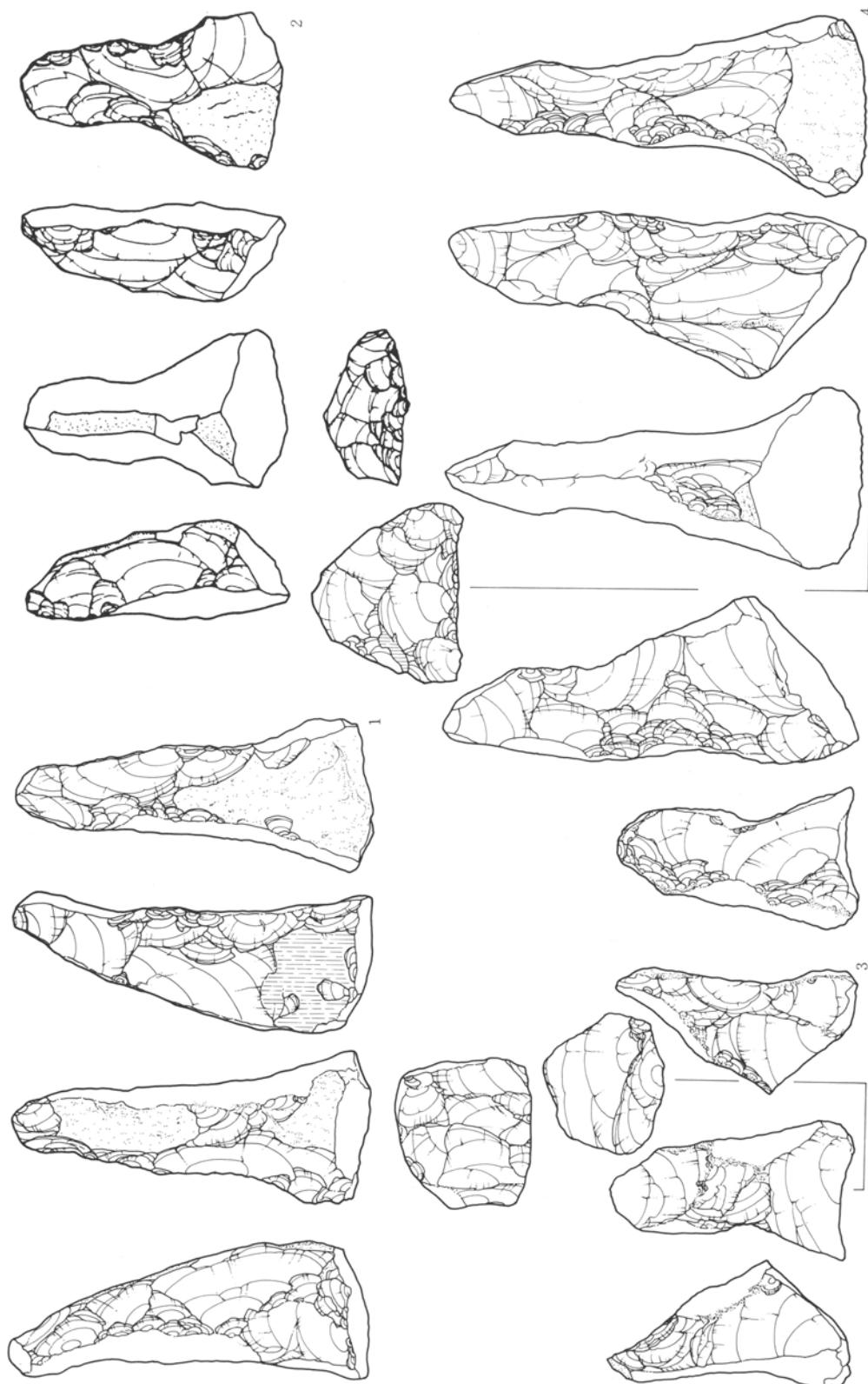
スタンプ形石器 スタンプ形石器は礫を分割することによって作出され、素材となった礫形状を大きく加工することなく用いられることから素材の礫の形状に基づく分類が一般的に行われている。ここでは、素材の形状による分類（棒状礫：I類、偏平礫：II類）と整形加工による分類（8）をおこなっている小田静夫氏に従い、同様な基準で分類をおこなった。

(2) 分析資料

三角錐形石器は赤城山南麓および西麓をはじめとする利根川上・中流域を中心に特徴的に分布することが確認され、30余の遺跡をかぞえる。これらのほかにも出土地点の不明な資料を含め相当数が存在することが予想される。分析資料として荒砥川左岸の丘陵性台地上に隣接して所在する荒砥北原遺跡・荒砥北三木堂遺跡・荒砥天之宮遺跡出土の三角錐形石器35点・スタンプ形石器20点を扱い、使用時の状態を明確に把握される中棚遺跡出土の三角錐形石器を参考資料として用

10cm
0

第1図 三角錐形石器の諸形態(Ⅰ類)





第2図 三角錐形石器の諸形態(II類)

いる。

荒砥北原遺跡出土の石器 摳糸文土器に伴うとみられる石器群は、調査区の2地点 (A・B ブロック) に確認されている。A・B ブロックは120m～130mの距離を隔てて検出され、ともに軟質ローム層の上半部より出土している。出土状態の良好なA ブロックは総計150点(うち、土器片46点) が長径40m×短径20mの範囲に出土している。部分的に前期(黒浜期)の土器片(7点)の分布と重複するが、大半は無文土器を主体とする撚糸文系土器の分布に一致する。三角錐形石器・スタンプ形石器・局部磨製石斧・礫器・削器などが出土している。

三角錐形石器は総計15点 (I a類5点、I b類2点、II a類5点、II b類1点、不明2点) が出土している。3点を除いたほかはいずれも再生状態を示し最終的に放棄された状態にある。いずれも黒色頁岩を用いる。スタンプ形石器は総計8点 (Aタイプ4点、Bタイプ2点、Cタイプ2点) が出土している。石器石材の内訳は輝石安山岩2点、変質安山岩2点、石英閃緑岩2点、グラノファイバー1点、黒色頁岩1点である。

荒砥北三木堂遺跡出土の石器 今井沼に臨む丘陵性台地先端部・長径50m×短径30m程の範囲に弧状に出土している。大半が撲糸文系土器や前期（諸磯期）の土器片の分布と重複するため三角錐形石器がいずれの土器型式に伴うのか、また、これに伴う石器組成等は明らかではない。

三角錐形石器は総計18点（I a類10点、I b類1点、II a類6点、II b類1点）が出土している。3点を除いたほかはいずれも再生状態を示し最終的に放棄された状態にある。いずれも黒色頁岩を用いる。スタンプ形石器は総計12点（Aタイプ5点、Bタイプ4点、Cタイプ3点）が出土している。石器石材の内訳は輝石安山岩（粗粒）9点、輝綠岩1点、黒色頁岩1点である。

荒砥天之宮遺跡出土の石器 三角錐形石器は単独に出土している。撲糸文系土器や前期・中期の土器片が少量出土しているが、三角錐形石器がいずれの土器型式に伴うのか、また、これに伴う石器組成などは不明である。

三角錐形石器は総計2点（I a類1点、II a類1点）が出土している。石材には黒色頁岩を用いている。

3 諸属性の分析

三角錐形石器はわずかながら使用状況を類推することの可能な資料が検出・報告され、スタンプ形石器と同様な機能的側面が指摘されているが、一方では、石器石材の選択および石器製作上の明確な相違も指摘されている。ここでは両者の機能的構造を明らかにするために両者を同様な視点で比較検討する。

(1) 長さと幅（第3図）

平面上の長さと幅 三角錐形石器の場合、I a類では長さ8cm～15cm・幅5cm～8cmに集中し、中棚遺跡出土のI a類も同様な傾向を示す。I b類では1点（長さ19.0cm・幅8.2cm）を除く2点が長さ10cm～12cm・幅7cm～8cmに分布する。II a類では長さ7cm～11cm・幅5cm～7cmに集中し、II b類では長さ10cm～11cm・幅6cm～7cmに分布する。I・II類はほぼ一定の範囲内に存在するが、分析資料には廃棄資料および再生資料を含んでいることや資料不足による資料的な限界を考慮しなければならない。I a類では明らかに使用時の状態を示すとみられる5点は長さ10cm～16cm、幅7cm前後に偏って存在し、より大形である傾向が指摘される。スタンプ形石器の場合、Aタイプでは長さ10cm～12cm・幅6cm～8cmに、Bタイプでは長さ12cm～14cm・幅7cm～9cmに、Cタイプでは長さ11cm～13cm・幅7cm～9cmに集中する。

三角錐形石器はI a・II a類に分布域の相違（II a類は長さ10cmを下まわる傾向にある）と散漫な分布傾向が、また、I b・II b類には分布傾向の類似性がそれぞれ指摘されるが、スタンプ形石器はA・B・Cタイプともほぼ一定の範囲内に分布する。

底面部の高さと幅 三角錐形石器の場合、I a類では高さ4cm～6cm、幅5cm～8cmに集中するが、中棚遺跡出土のI a類は高さ6cm～8cm・幅5cm～8cmに集中する。I b類では1点を除く2点が高さ3cm・幅7cm～8cmに分布する。II a類では高さ3cm～5cm・幅5cm～8cmに集中

し、II b 類では高さ 3 cm~4 cm・幅 6 cm に分布する。I a 類では明らかに使用時の状態を示すとみられる 5 点は高さ 6 cm 前後、幅 5 cm~8 cm に偏って存在し、より大形である傾向が指摘される。スタンプ形石器の場合、A タイプでは高さ 3 cm~5 cm・幅 5 cm~8 cm に、B タイプでは高さ 4 cm~5 cm・幅 6 cm~7 cm に、C タイプでは高さ 4 cm~6 cm・幅 6 cm~8 cm に集中する。

三角錐形石器は I a・II a 類に分布域の相違 (II a 類は高さ 5 cm を下まわる傾向にある) と散漫な分布傾向が、また、I b・II b 類には分布傾向の類似性が指摘されるが、スタンプ形石器では A タイプと B・C タイプでの分布傾向 (A タイプはより散漫な分布傾向を示す) に若干の相違が認められる。

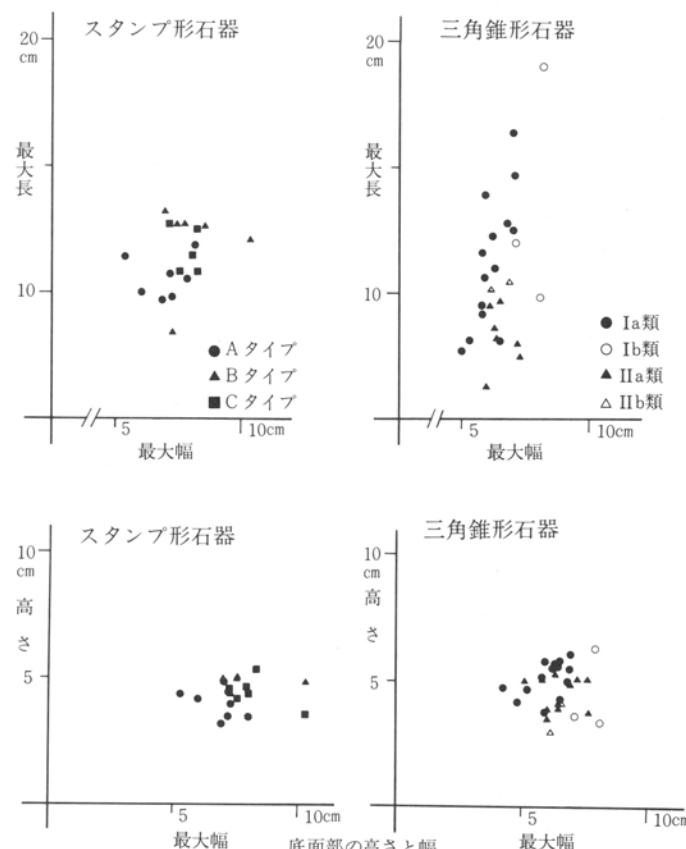
(2) 重量 (第 4 図)

三角錐形石器の場合、I a 類では重さ 200~800 g に分布 (200~400 g に集中) するが、中棚遺跡出土の I a 類では重さ 200~300 g・300~400 g・600~800 g に集中する。I b 類では 1 点を除く 2 点が 200~300 g に分布する。II a 類では重さ 300~400 g に集中し、II b 類では重さ 200~300 g 集中する。I a 類では明らかに使用時の状態を示すとみられる 5 点は 500~600 g に偏って存在し、より大形である傾向が指摘される。スタンプ形石器の場合、A タイプでは 300~600 g に、B タイプでは 500~600 g に、C タイプでは 400~600 g に集中する。

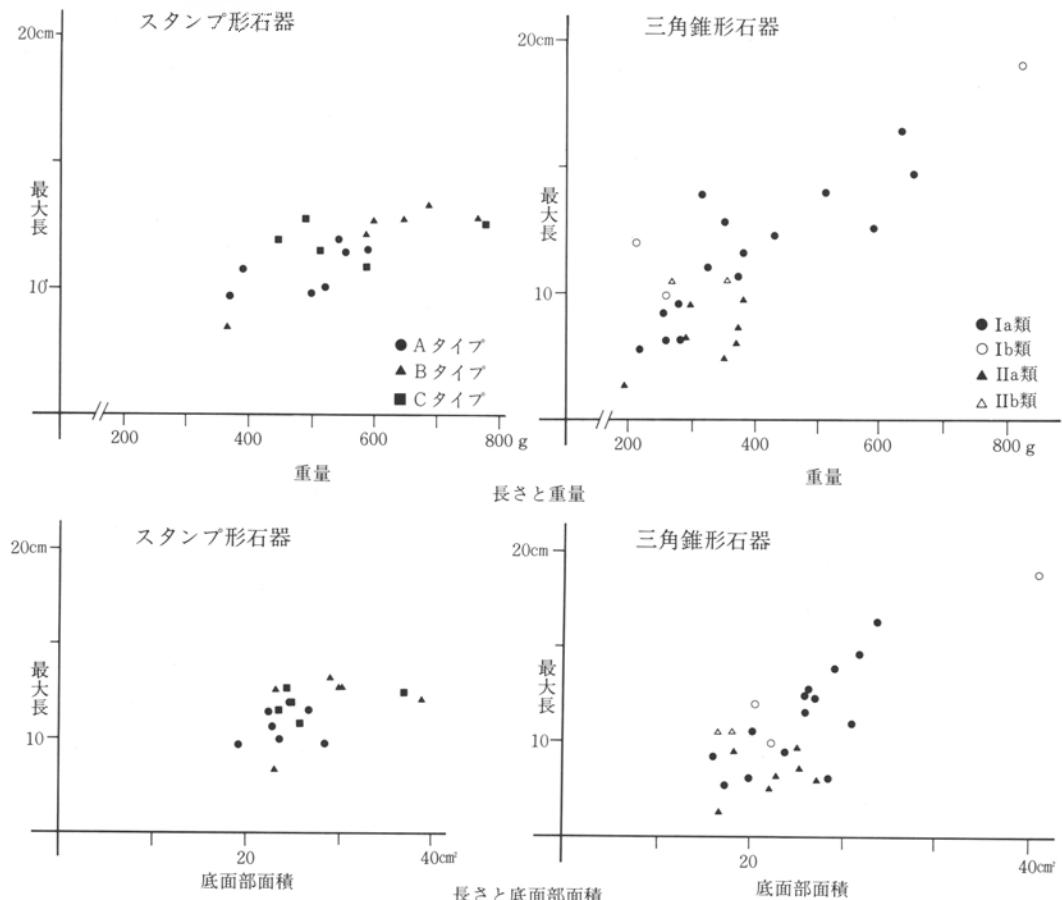
三角錐形石器は I a・II a 類に分布域の相違 (I a 類はより散漫な分布傾向にある) が、また、I b・II b 類に分布傾向の類似性が指摘されるが、スタンプ形石器では A タイプと B・C タイプとの分布傾向 (A タイプはより散漫な分布傾向にある) に若干の相違が認められる。

(3) グリップ・サイズ (第 5 図)

諸属性のうち、石器とその使用者とが接する部分 (握部) の示す大きさを石器のグリップ・サイズとして以下の分析を行なった。分析資料では、石器頭部を測定基点として 1 cm 毎に値を計測



第 3 図 属性分析(1)



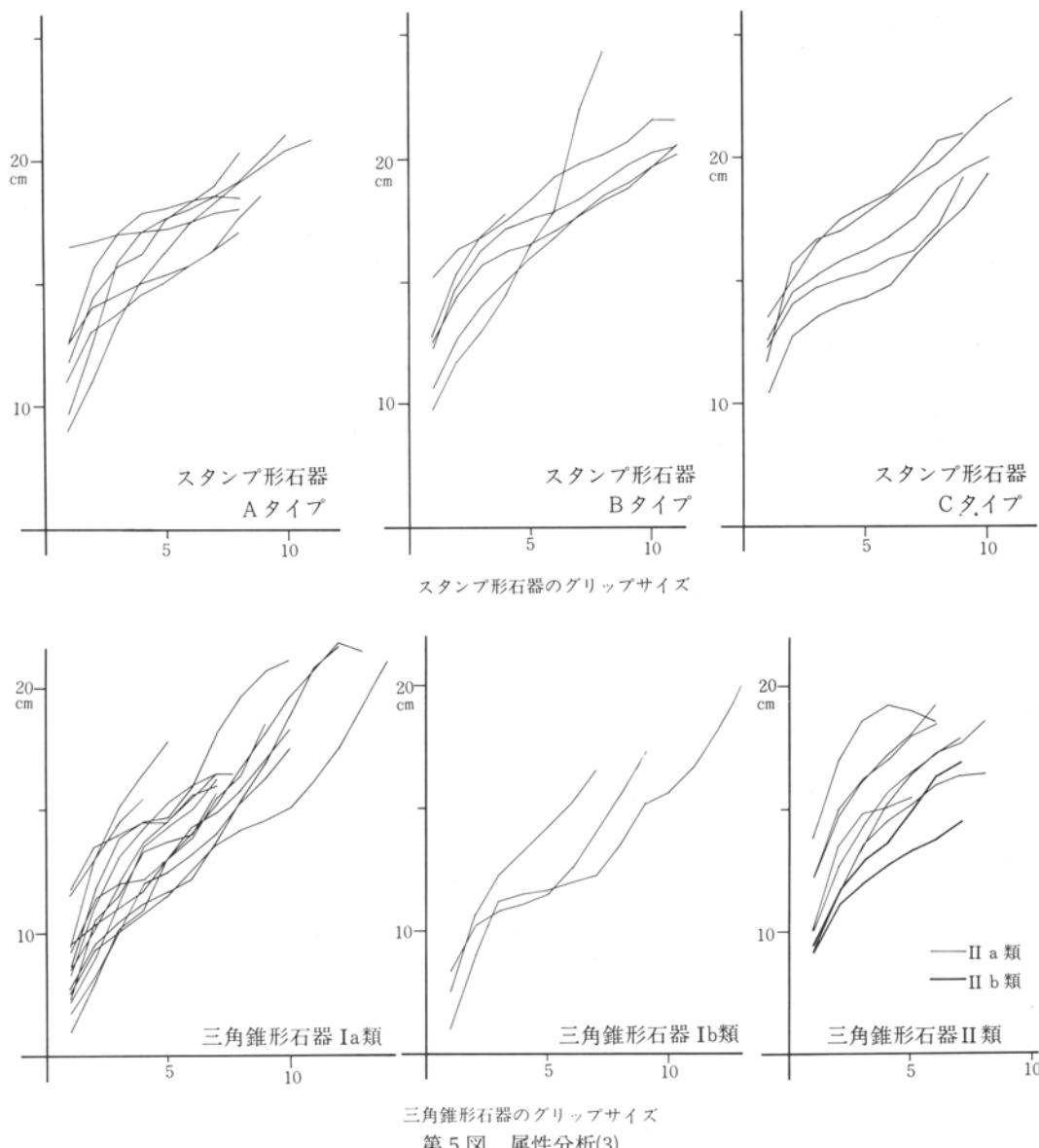
第4図 属性分析(2)

し、比較検討を行なった。三角錐形石器の場合、石器頭部より 1 cmでの計測値の平均は、I a 類では 8.0cm、I b 類では 7.3cm、II a 類では 12.3cm、II b 類では 9.3cmを測り、また、石器頭部より 5 cmでの計測値の平均は I a 類では 13.8cm、I b 類では 12.5cm、II a 類では 16.5cm、II b 類では 14.1cmを測る。いずれも相似形を示すことが理解される。スタンプ形石器の場合、石器頭部より 1 cmでの計測値の平均は A タイプでは 11.9cm、B タイプでは 12.2cm、C タイプでは 12.1cmを示し、暫時計測値は増加する。また、石器頭部より 5 cmでの計測値の平均は A タイプでは 19.5cm、B タイプでは 16.9cm、C タイプでは 16.3cmを測る。

概ね、三角錐形石器 I・II 類はスタンプ形石器に類似する計測値を示ながら推移する。

(4) 底面部面積 (第4図)

三角錐形石器の場合、I a 類の多くは 20cm²～30cm²に集中するが、I a 類では明らかに使用時の状態を示すとみられる 5 点の計測値の平均は 29.4cm²を示す。I a 類全体での計測値の平均は 25.6cm²を測る。中棚遺跡出土の I a 類では 25cm²～35cm² (計測値の平均 29.0cm²) に集中する。II a 類の



第5図 属性分析(3)

多くは 15cm^2 ～ 25cm^2 に集中する。II a類全体での計測値の平均は 21.2cm^2 を測る。スタンプ形石器の場合、計測値の平均はAタイプで 24.0cm^2 、Bタイプで 28.9cm^2 、Cタイプで 27.7cm^2 を示し、いずれも 20cm^2 ～ 30cm^2 に集中する。

三角錐形石器 I a・II a類の底面部面積は 20cm^2 ～ 30cm^2 に集中し、スタンプ形石器の底面部面積と同様な傾向を示す。

(5) 欠損

分析資料のなかで明確に使用時の欠損として捉えうる可能性のある事例は、荒砥北原遺跡出土の1点が存在するにすぎない。分析資料の制約から使用によって生じる欠損部位の多寡を指摘す

ることは現状では困難であるが、埼玉県前原遺跡・群馬県三室B遺跡に良好な資料が出土している。⁽¹³⁾ 前原遺跡では22点の欠損資料が認められ、すべてが使用による欠損とはいえないもののおおよその傾向を把握することができる。欠損資料の多くが握部付近で欠損（I a類・10点、II a類・10点）し、主機能部に欠損の認められる資料（II a類・3点）は極めて少ない。また、主機能部を正面とした場合、握部付近で欠損する資料の多く（20点のうち12点）は裏面側を支点に欠損している。三室B遺跡ではI a類に9点の欠損資料が認められ、そのうちの6点が前原遺跡の場合と同様に裏面側を支点に欠損している。裏面側を支点にする破損状態はこれらの事例に限らず他の遺跡においても普遍的に存在するようであり、三角錐形石器に与えられたひとつの機能的側面を示すのではないかと思われるが、三角錐形石器の構造上最も弱い部分から欠損しているとも言えよう。⁽¹⁴⁾ 一方、スタンプ形石器の分析のおこなわれたはけうえ遺跡では、Aタイプ61点のうち5点の破損品が、Bタイプ29点のうち7点の破損品が、Cタイプ36点のうち20点の破損品が指摘され、破損率はAタイプでは8%に、Bタイプでは24%に、Cタイプでは56%に及び、多くの破損品が認められるにもかかわらず、破損状況に関する明確な説明は行われていない。各々のタイプにみられる破損の詳細は不明確であるが、分析結果は必ずしも機能的側面より類推される欠損の状態に一致しないようである。器体の中央付近で欠損する資料が主体を占めるが、この部分で多くが欠損する必然性は乏しい。

（6）使用痕

分析資料のうち、三角錐形石器には明確な使用痕は観察されず、機能・用途を直接的に明らかにしえない。そのなかで、中棚遺跡（第8図）・三室B遺跡や前原遺跡（第9図）には明確な使用痕の観察される資料が出土しており、使用状況を良好に示すと考えられる。中棚遺跡では総計24点の三角錐形石器（I a類・22点、II a類・2点）が出土しているが、このうち10点（I a類・8点、II a類・2点）の資料に明確な使用痕が認められ、いずれも石器底面部の中央付近に観察される。三室B遺跡では総計21点の三角錐形石器（I a類・14点、I b類・2点、II a類・2点、分類不能2点）が出土している。このうち4点（I a類・4点）の資料に明確な使用痕が認められ、いずれも石器底面部の中央付近に観察される。前原遺跡では総計30点の三角錐形石器（I類15点のうちI a類9点・分類不能6点、II類15点のうちII a類8点・II b類2点・分類不能5点）が出土している。このうち4点（I a類・3点、II b類・1点）の資料に明確な使用痕が認められ、I a類の3点は石器底面部の中央付近に、II b類の1点は石器底面部の下縁に使用痕が認められる。主機能部とみられる石器底面部は複剝離面を構成するが、底面部傾斜角が90°前後を示すa類の場合では底面部の中央付近に、底面部傾斜角が60°前後を示すb類の場合では底面部の下縁に使用痕の偏在する傾向が認められる。

一方、スタンプ形石器には北原遺跡で8点中4点に、北三木堂遺跡で12点中6点に、三室B遺跡で28点中19点に摩耗痕や剝落痕などの使用痕が観察される。

現状では三角錐形石器に観察される使用痕は必ずしも多くはないが、詳細に観察することによ

第1表 石器と石材の関係

※太字の石材は10点以上、()内の石材は1・2点の出土を示す

	三後沢遺跡	中棚遺跡	三原田城遺跡	北原遺跡
石鏃	黒頁 黒 (流凝) (チ)	チ 黒頁 黒安 黒	黒 チ 黒頁 珪頁	黒頁 チ 流
石錐	黒頁 頁	黒頁 チ 黒安 珪	黒頁 黒 黑安 珪変	
石匙	黒頁 黑安 (石閃)	黒頁 チ 黑安 黑	黒頁 チ 黑安 黑	
削器	黒頁 黑安 (安)	黒頁 黑安 珪	黒頁 黑 チ 黑安	黒頁 黑安
打斧	(流凝)	黒頁 黑安 (凝) (蛇)	黒頁 黑安 点頁 珪頁	黒頁 輝安 (細)
磨斧	黒頁	蛇 緑片 輝蛇	点頁 变蛇 变輝 凝	黒頁 变玄
三角		黒頁 (黑安)		黒頁
スタ		輝安		輝安 变安 石閃
磨石	(石閃) (花崗)	輝安 (緑片) (花崗)	輝安 石閃 溶凝 珍	輝安 石閃
凹石	石閃 石安 凝砂 (安)	輝安	輝安 (溶凝)	輝安
石皿	石安	輝安 (緑片)	輝安 (石閃)	
敲石	石閃 石安 (凝砂) (安)	(黒頁)	輝安 石閃 珍	黒頁 輝安

	東山遺跡	前原遺跡	北坂遺跡	青陵高校地内遺跡
石鏃	チ 硬頁 黒 硬砂頁	チ 黒 硬頁	チ	
石錐		チ		
石匙		(チ)		
削器	硬砂頁 硬頁 頁 チ	砂 チ 硬頁 (石片)	硬砂頁 頁 硬頁 (砂)	フ 硬砂 (チ)
打斧	硬砂頁 硬頁	砂 フ 紗片 粘	硬砂頁 頁	安 フ 流
磨斧	硬砂頁 硬頁 砂	砂 フ 安 硬頁	硬砂頁 頁	砂 (フ) (チ)
三角	硬砂頁 (硬頁)	砂 石斑 硬頁 珪頁	硬砂頁 頁	石斑 流
スタ	砂 閃 石閃	砂 石斑 安 (閃)	花崗 閃 砂 (結片)	石斑 流 珍
磨石		安 中砂 細砂 (フォ)	砂	流 安 石斑
凹石		安 (閃)	閃	
石皿	緑片 閃 (安) (石片)	閃 緑片	安 流	
敲石		チ 中砂 細砂 (砂)		安 流 石斑

チ=チャート 硬頁=硬質頁岩 黒=黒曜石 硬砂頁=硬質砂質頁岩 頁=頁岩 砂=砂岩 フ=フォルンフェルス 硬砂=硬質砂岩 紗片=絹雲母片岩 粘=粘板岩 安=安山岩 流=流紋岩 輝緑=輝緑岩 石片=石英片岩 緑片=緑泥片岩 石斑=石英斑岩 珪頁=珪質頁岩 閃=閃緑岩 石閃=石英閃緑岩 花崗=花崗岩 珍=珍岩 中砂=中粒砂岩 細砂=細粒砂岩 黒頁=黒色頁岩 流凝=流紋岩質凝灰岩 黑安=黒色安山岩 珪=珪岩 珪変=珪質変質岩 凝=凝灰岩 蛇=蛇紋岩 点頁=点紋頁岩 变蛇=变質蛇紋岩 变輝緑=变質輝緑岩 变玄=变質玄武岩 輝安=輝石安山岩 变安=变質安山岩 溶凝=溶結凝灰岩 石安=石英安山岩 凝砂=凝灰質砂岩 三角=三角錐形石器 スタ=スタンプ形石器

り使用痕の観察される資料はさらに増加すると思われる。分析資料ではスタンプ形石器には石器総量の50%に使用痕が認められるが、三角錐形石器には中棚遺跡で41%に使用痕が認められるものの三室B遺跡では16%、前原遺跡では13%に使用痕が観察されるに過ぎず、使用痕の観察される頻度に相違がある。この相違は使用対象物の差を反映したものと考えることもできるが、後述するような機能部の再生の有無による要因も考慮しなければならない。

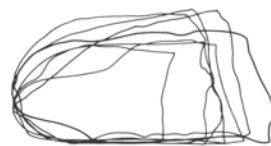
(7) 石材 (第1表)

荒砥北原・荒砥北三木堂・荒砥天之宮遺跡出土の三角錐形石器はいずれも黒色頁岩を、スタンプ形石器は輝石安山岩(粗粒)・变質安山岩・石英閃緑岩などを用い、石器石材選択上の明らかな

三角錐形石器 Ia類



II類(棒状礫素材)



Ib類



II類(偏平礫素材)



第6図 形態別にみる断面形状



相違が認められる。同様な傾向は利根川上・中流域に所在する遺跡では一般的に看取され、石材の供給源の相違する埼玉県北坂遺跡・東山遺跡（第1表参照）でも同様な傾向が認められる。埼玉県前原遺跡・栃木県清陵高校地内遺跡では、砂岩・石英斑岩が三角錐形石器およびスタンプ形石器のいずれにも用いられるが、堆積起源が第三紀層に由来する岩石と中・古世層に由来する岩石とでは粒径の相違あるいは珪化作用による変質の相違が認められ、石材性状の観点からみれば利根川上・中流域と同様な石器石材の選択性（傾向）が指摘される可能性が強い。一般に、群馬県北部の新第三紀層に由来する黒色頁岩は珪化作用による変質を遂げ、風化の進行は珪化作用の大小による可能性が高い。珪化作用がより大きな場合岩石はより硬質となるため石器製作の難易度に大きく拘わることが推測される。また、珪化作用の大小は礫形状の大小に拘わらず等しく存在する。したがって、原石の採集にあたり珪化作用の大小および礫形状によって石材は意識的に選択され、最終的な各々の石器形態に対応するものと思われる。分析資料のうち、礫形状の明らかな黒色頁岩には風化の顕著な一群と風化の弱い一群が認められ、前者には三角錐形石器II類の偏平礫を用いる一群が、後者には三角錐形石器II類の棒状礫を用いる一群が対応し、最終的な石器形状に近い原石が採集されている。原石形状および石材性状による石材選択の存在は明らかであり、このような諸条件を反映した結果、同一の技術基盤上に作出され同一器種として認定されるなかにも、I・II類という形態上のバラエティーが生じる要因が存在する。

4 石器製作技術上の特徴とその構造

一般に、石器の製作は集団の伝統に規制されるなかでおこなわれると理解される。三角錐形石器は様々なバラエティーを示すが、三角錐状を呈する形態観と石器製作工程上の特徴よりいわゆる礫核石器として把えられる。したがって、原石の採集時には明らかに石器の完成状態がイメージされており、目的に応じた形状の礫が採集されたものと思われる。三角錐形石器の製作工程は以下のように示される。



第7図 北原・北三木堂遺跡出土の石器と再生剥片

原石の採集 → 荒割り工程 → 仕上げ工程
(選択) (細部加工)

原石の採集 磰核石器一般にみられるように、原石の形状は石器形状を大きく逸脱しない範囲内で選択されると思われる。部分的に礰表皮を残す事例が認められることから最も適切な礰の形状は長さ20cm・幅10cm・厚さ8cm前後の棒状礰であることが計測値から推定することができる。また、大形の偏平礰等の場合、分割により適切な形状を得る可能性も指摘される。

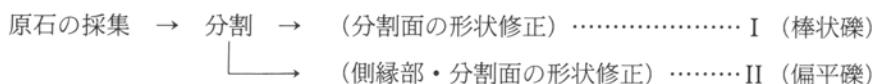
荒割り工程 磔核石器では石器の大まかな形状が作出されるまでを荒割り工程として一般的に理解されている。これと同様に大まかな形状が作出されるまでを三角錐形石器の荒割り工程として理解する。荒割りは両側面を中心とした握りの部分の作出から機能部の作出に至るが、礫の形状は最終的な形状に向かって漸移的に移行する。握り部および機能部での断面形は三角形状あるいは四角形状を呈し、これらの形状作出を念頭に打撃角および打撃点が選択されている。

仕上げ工程 前工程で大まかな石器の形状が作出された後、主に握部および機能部を対象としておこなわれる。スタンプ形石器の場合、両側縁部は握りやすくする目的で潰されることが多いが、三角錐形石器の場合、側縁整形に伴う細部加工によることがより多い。機能部の正面観は三角形・四角形ないしは五角形を呈すが、その周辺部には側縁部に認められる側縁加工と同様な細部加工が施され、正面観が整えられる。

石器製作技術上の構造 荒砥北原遺跡では、黒色頁岩を素材とする12点の三角錐形石器が出土し、これらは風化の顕著な一群（A群）と風化の弱い一群（B群）からなることが指摘される。⁽²⁰⁾ これらは一括遺物的な出土状態を示しているが、これらと共に16点の削器・加工痕ある剝片・使用痕ある剝片が出土している（第7図1～4）。これらの16点の石器はいずれも黒色頁岩を素材とし、母岩別資料の観点から風化の顕著な一群あるいは風化の弱い一群に分類される。第7図1～4は風化の顕著な一群に分類される削器や加工痕・使用痕ある石器であり、いずれも部分的に礫表皮を残し、工程上の初期に作出される大形の剝片を用いている。また、風化の弱い一群に分類される削器・加工痕ある石器・使用痕ある石器も同様な評価をくだすことができる。さらに、同様な状態は荒砥北三木堂遺跡においても認められる。以上のように、削器・加工痕ある石器・使用痕ある石器には工程上の初期に作出される剝片が多用され、剝片を選択する際の指向性も窺われる所以であるが、これらの剝片が体系的に作出されているのであればその構造を明らかにする必要があろう。三角錐形石器およびこれを含む石器群の構造に地域的な相違が存在する可能性は認めなければならないが、現状では、普遍的な形態的特徴を示す三角錐形石器ではその形状作出に腐心せざるをえず、これと同時に目的的剝片を量産することは困難であり、同一の石器製作工程上には共存しないと判断される。

なお、出土資料には三角錐形石器再生剝片が多数（接合資料を含む）認められる。散漫に分布する計測値および相似形に推移する傾斜角（第6図）の示すデータは再生の存在を明瞭に示すといえよう。接合状態は意図的な石器の再生をも示唆するが、現状では頻繁に石器の再生をおこなう必然性は明らかでなく、今後検討すべき課題のひとつである。

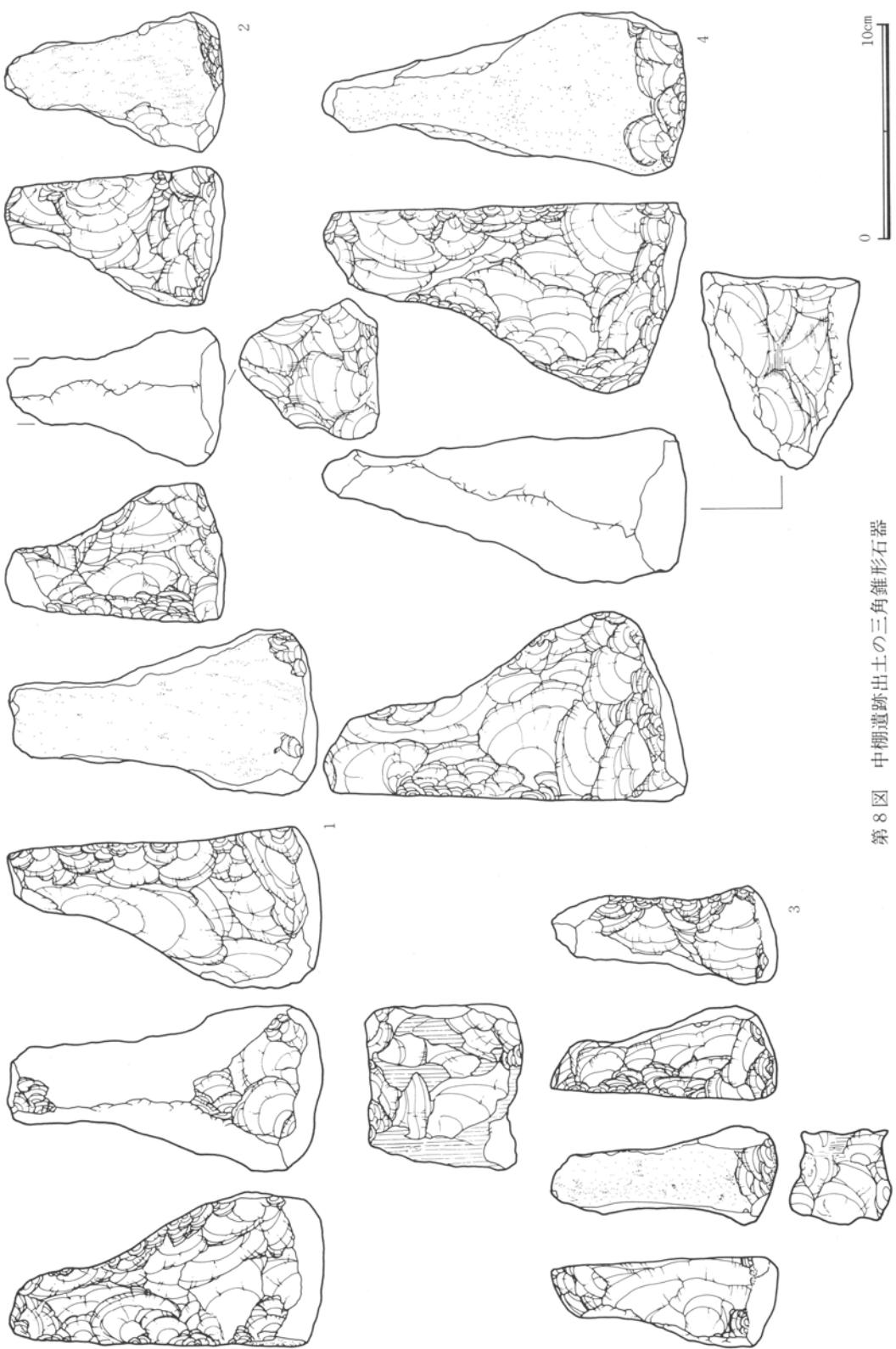
一方、スタンプ形石器の製作工程については小田氏によって明らかにされているが、以下のように把えられる。

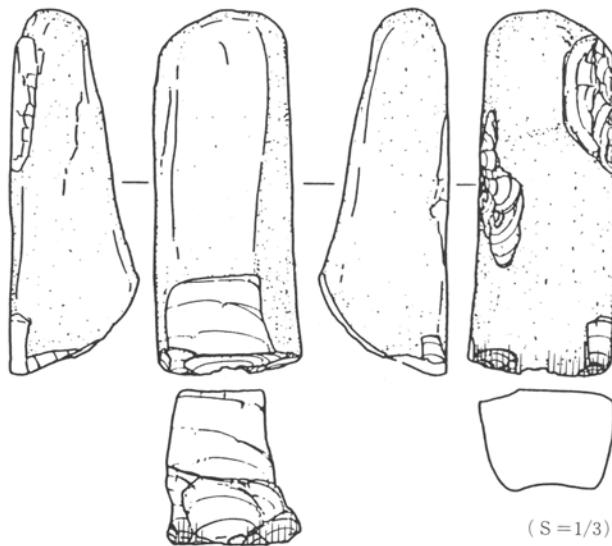


スタンプ形石器では、側縁部および分割面に施される整形加工は部分的な形状修正に限定され

0 10cm

第8図 中棚遺跡出土の三角錐形石器





第9図 前原遺跡出土の三角錐形石器(一部加筆)

堂・荒砥天之宮遺跡出土資料の分析より、三角錐形石器とスタンプ形石器には類似あるいは相違するいくつかの特徴が抽出される。第3～5図に明らかなように、三角錐形石器およびスタンプ形石器より得られる計測値を比較した場合、三角錐形石器はより散漫な状態に分布する傾向が指摘されるが、これは分析資料には再生資料を多く含むこと、I・II類には機能上の分化が存在することなど資料的制約に起因するものであり、両石器より得られる計測値には大きな相違は認められない。また、スタンプ形石器の各々のタイプより得られるデータは、小田氏の示すデータとも矛盾することはない。

三角錐形石器に認められる欠損状況は前原遺跡出土資料に明らかなように器体中央（握り部）付近での欠損が80%以上を占め、20点のうち12点が裏面側を支点に欠損している。同様な欠損状況は普遍的に認められ、石器に与えられたひとつの機能的側面を示す可能性とともに、構造的に弱い部分から欠損する必然性をも反映している。スタンプ形石器の場合、欠損状況は明確に欠ける。はけうえ遺跡には多くの欠損資料が出土しているが、欠損状況は機能的側面より類推される状態に一致しないようであり、第二・第三の要因を想定すべきなのかもしれない。現状では、三角錐形石器およびスタンプ形石器の欠損状況にはその機能との明確な因果関係は認められないが、さきに述べたように諸属性の分析により得られたデータが互いに類似し、大きな相違が認められないということは、いずれも体部を直接手に握って使用されることを示していよう。機能的には、三角錐形石器には底面部傾斜角の相違（a類・b類）にもとづく使用痕の偏在性が認められ、a類にスタンプ形石器と同様な「敲く・潰す」という機能が、またb類にはいわゆる「スクレイパー・エッジ」様の機能部が作出されるが、重量（200～300g）を考慮すると打割具に類似した機能がそれぞれ想定される。

るため、すべての原石（礫）形状が明確に把握される。偏平礫を素材とした場合の側縁加工は一側縁あるいは二側縁に施されるが、表裏両面からの剥離痕や打撃痕によって抉入状の整形加工にとどまっている。また、分割により作出される主機能部は平坦であることが求められ、この平坦面を得られない場合にのみ整形加工が施される。

5 機能上の類似性と形態上の相違

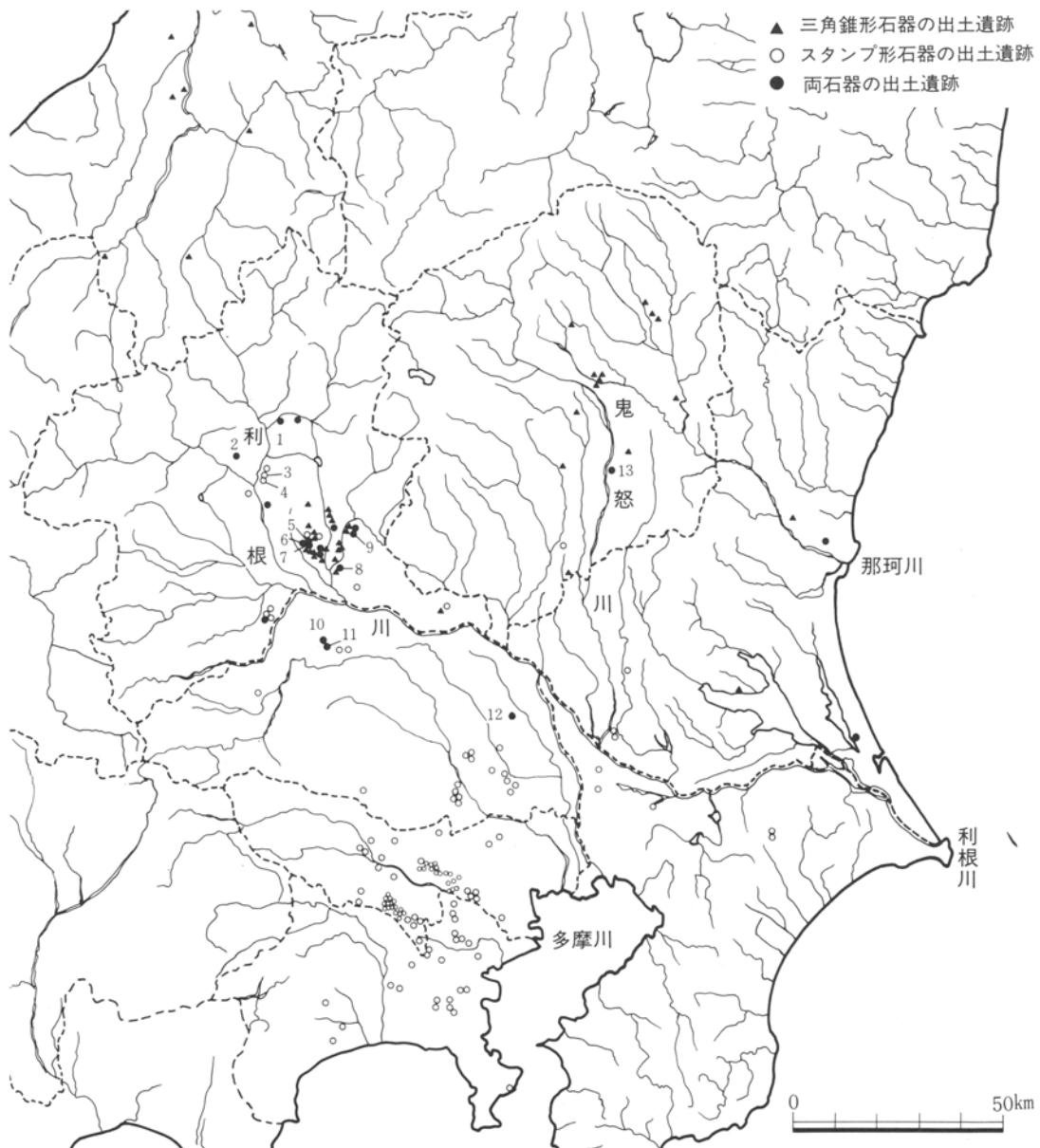
これまでの荒砥北原・荒砥北三木

一方、両石器には使用石材および石器製作技術上の著しい相違が認められる。すなわち、三角錐形石器には黒色頁岩が用いられ、①原則として原石形状を大きく修正すること、②意図的であるのか否か明確でないが、機能部の再生をおこなうこと、等の特徴をもつて対し、スタンプ形石器には輝石安山岩・石英閃綠岩などが用いられ、①取捨選択の容易な状態で行われる原石の採集の結果、部分的な側面加工等は存在するが、形状修正は原則的におこなわざ用いられる。②意図的な機能部の再生は存在しない。という相違が存在するのである。

以上のように、三角錐形石器とスタンプ形石器には類似性を上まわる著しい相違が存在しており、部分的な機能上の類似性をもって「スタンプ形石器の亜形態」⁽²³⁾として評価することは急にすぎるのでないだろうか。むしろ三角錐状を呈する形態観を執拗なまでに指向すること、形態上のバラエティー・機能上の分化などが構造的に存在することの二点に三角錐形石器の存在意義が見いだされるべきであり、両石器は互いに用途上の相違を分担すると判断される。（岩崎）

6 三角錐形石器とスタンプ形石器の分布

三角錐形石器を出土している遺跡例は第10図のよう関東地方北部を中心としてすでに64遺跡にのぼっている。その県別の内訳は群馬県が34例ともっとも多く、次いで栃木県の16例、新潟県⁽²⁴⁾の7例、茨城県の4例、埼玉県の3例という順になっており、現在のところ、東京都・神奈川県・千葉県では検出されていない。また、出土総量ではやはり群馬県が多く、全体としては200点以上を越え、10点以上出土している遺跡として中棚(1)・八木沢清水(2)・荒砥(6)・柳久保(5)・三室B(8)・和田(9)・⁽²⁵⁾荒砥北三木堂(7)遺跡などがある。埼玉県での総量は45点、栃木・茨城・新潟の3県の詳細は不明であるが、栃木県で20点、茨城・新潟県でそれぞれ10点前後の事例が知られている。群馬県内で特にその分布が目立つのは県中東部に位置する赤城山西・南麓の丘陵・台地地域であり、34遺跡のうち31遺跡がこの地域に存在している。栃木県では、那珂川や鬼怒川の上流域の丘陵・台地地域にそのほとんどが集中している。茨城県でも那珂川下流域に2例、鬼怒川下流域に3例認められる。また、新潟県では千曲川の中・下流域に集中し、主に三国山脈寄りの地域に偏在するようである。これらの分布を総合的にみると次の3つの地域に大別することができる。①利根川上・中流域を中心とする地域であり、埼玉県北部の地域もこの圏内に入る。②鬼怒川・那珂川両河川の上流域を中心とする地域であり、中・下流域の茨城県をも包括する。③三国山脈に近接する千曲川の中・下流域である。これらの地域は個々に孤立しているように見えるが、①と③は三国山脈を挟んで、また①と②は足尾山地を挟んでそれぞれ隣接しており、地形的な制約による見かけ上の分布の不連続性を考慮する必要があろう。資料的な制約はあるにしても現段階における事例数で比較すれば、明らかに①>②>③という傾向があり、①の地域を中心として②・③地域へと徐々にその分布が薄くなる様相を呈している。つまり、①の地域を中心にして②・③の地域はその周縁圏的なあり方を示していると理解される。しかし、これらの分布圏も大枠でみれば、関東地方北部地域でくくることができ、かつて栗原氏が想定した分布圏の適確さを追証する



第10図 三角錐形石器とスタンプ形石器の分布

▲群馬 柏倉堀久保 長田D 月田 白藤 神社裏 向山 上大屋 上西原 堤東 今井道下 二之宮谷地 天之宮 飯土井中央 北通
下原 八寸B 曲沢 鹿島 近藤沼 波志江権現山 柄木 上久团地 金井台 神田前 下侍塚西 頭無 湯坂 篠原畜舎前 西ノ台
肘内 上ノ台 下猪子 中駒 寺山 白山平 茨城 軍民坂 赤塚古墳群 新潟 両留 五丁歩 小平尾 城之腰 三仏生 馬高 金沢
○東京 秋川二宮神社 はけうえ 上川原 藤の台 西之台B 尾崎 多摩ニュータウンNo145・559・205・661・604・605・740・726・727・
728・665・531・406・733 下布田 花沢東 下神明 武藏国分寺 小山田No13・23・28・15・27 上神明 武藏岡 武藏公園低湿地 下山
北川島谷 戸場 武藏台 下里本邑 貫井 七軒家 神谷原 北浦 鶴川A・B 前原 神明上 恋ヶ窪 栗原 深大寺池ノ上 築田寺
南 上野原 東京天文台構内 下沼部 前田耕地 出山 三鷹五中 貫井南 御伊勢前 不動尊 総合運動場内 宇津木台A 本町田M
埼玉 如来堂C 貝塚山第2 宮林 大林I 西大宮バイパスNo1・2・4 羽沢第2・9 中矢下A 馬場北 西松原第1 明花向B・
C 吉場4 駒前 駒形 栗谷ツ第6 北別所第1 北袋 彦久保 大宮A-230 神奈川 平根山 大丸 早川天神森 菅生水沢 竹鼻
一色 菅生 国道246西原 上浜田 上草柳第3 東方第7 莢田第10 亀の子山 山王山 小池 中丸 殿屋敷遺跡群C 向原 細田
上倉田第1・2 東田原八幡 六ツ川山王台 長津田西原 七ツ塚 群馬 空沢 向原 中江田 藤岡地区No25・29 北山 下堀工道溝
大稻荷 見立溜井 諏訪西 勝保沢 千葉 新空港No7 木の根 長崎 寺向 中山新田I 柄木 大境 奥山下根 大谷津A
柄木 烏森 ●群馬 中棚 長者久保 八木沢清水 城山 峰岸山 清水山 和田 柳久保 北原 北三木堂 下触牛伏 鷹巣 三室B
藤岡地区No20 埼玉 東山 北坂 前原 柄木 清陵高校地内 茨城 黒袴 常陸伏見

ものとも言える。

一方、スタンプ形石器の分布については、多摩川上・中流域に集中する傾向のあることが指摘されている。第10図は筆者の管見にふれたものを示したのであるが、これによってもそうした傾向をうかがうことができる。しかし、その分布は同地域にとどまるわけではなく、粗密の差こそあるものの三角錐形石器の分布圏をも包括したほぼ関東一円に広がっており、より広範な分布圏を形成している。言い換えるならば、三角錐形石器の分布圏は「基本的にスタンプ形石器の分布圏に含まれる」とすることができるるのであるが、凡関東的な分布傾向をもつスタンプ形石器に比べ三角錐形石器の分布の小地域性が指摘されよう。⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾

7 三角錐形石器の出現と消長

先述したように、三角錐形石器を出土している遺跡は64遺跡を数えるが、これらの事例の多くは表採や包含層からの出土資料であり、縄文時代の他時期の遺物と混在する例も多くみられる。それらの中から発掘調査による出土状況からみて、三角錐形石器をはじめとする石器群と確実に共伴すると判断される土器を比較的単純に出土している事例をとりあげてみると、群馬県の北原遺跡・和田遺跡、埼玉県の北坂遺跡（第10図の分布図のNo.10）・東山遺跡⁽¹⁾・前原遺跡⁽²⁾、栃木県の清陵高校遺跡⁽³⁾などの6遺跡をみいだすことができる。これらの遺跡の伴出土器は、いずれも草創期後半の撚糸文系土器である点で注目されるが、ここではそれらの土器を一括して分類し、その編年的位置付けを通じて三角錐形石器の出現と消長をたどってみたい。

なお、群馬県北三木堂遺跡では三角錐形石器が他の時期の遺物と混在するために時期的に確定できないが、出土している撚糸文土器が比較的単一な様相をもつてることや石器の属性分析との関連で参考資料として扱っておきたい。

1類（1～4） 口唇部・口縁部・胴部の三帯に縄文による文様帯を構成する土器である。縄文はR Lが主体であり、文様帯ごとにL Rを併用する例も目立つ。器形は口唇部を外側に折り返すように肥厚・外反させ、丸底状の尖底部をもつ。また、口唇下に指頭圧痕を残している。

本類は清陵高校遺跡で主体をなしており、他には前原遺跡でわずかに認められるのみである。

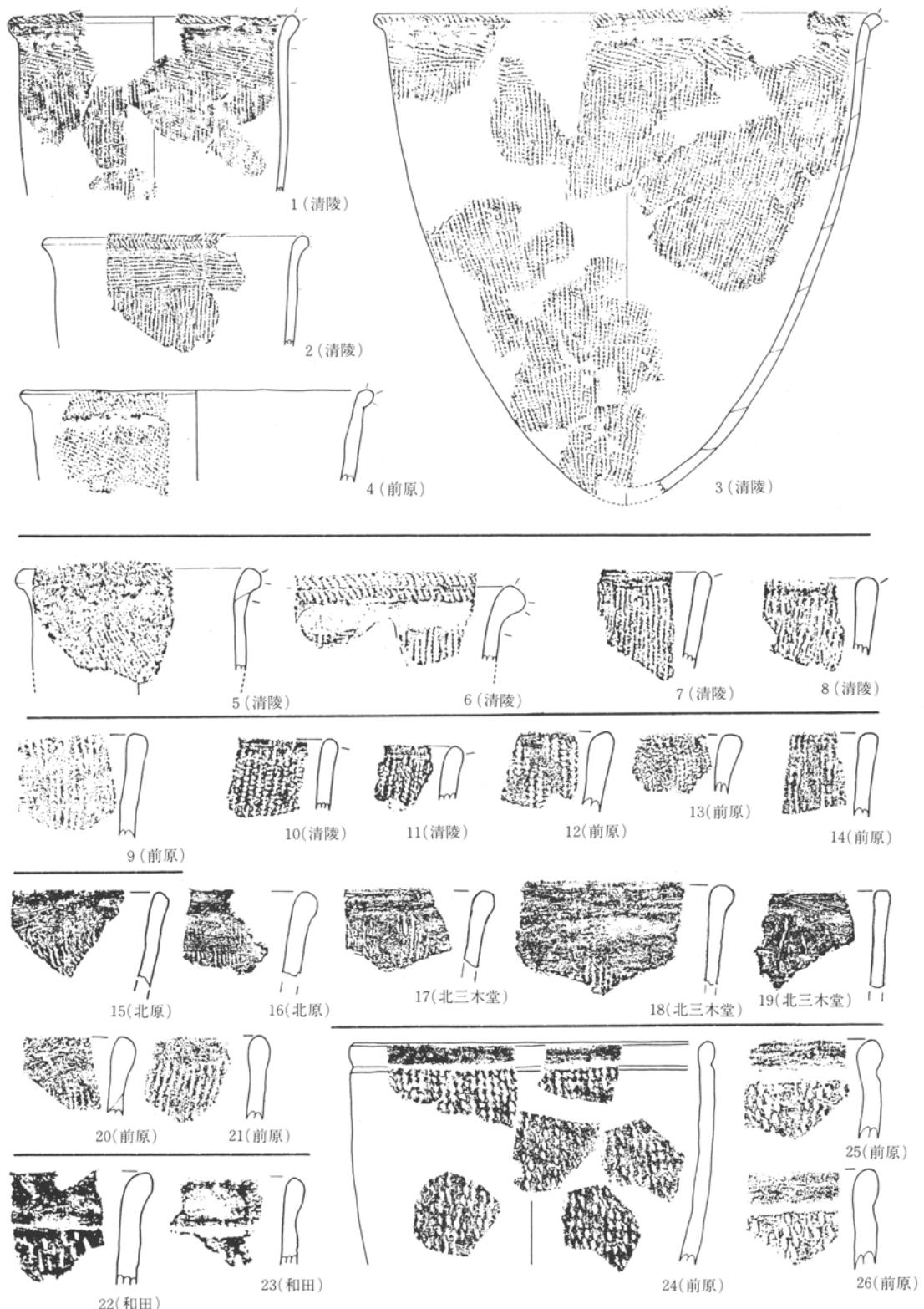
2類（5・6） 口唇部と胴部の二帯に縄文による文様帯を構成する土器である。縄文はR Lが主体を占めるが、撚糸文との併用も認められる。器形は口唇部が肥厚・外反するが、1類に比べてやや弱い。

本類は清陵高校遺跡で相当量認められるが、前原遺跡ではわずかに認められるのみである。

3類（7～9） 口唇部・口縁部に文様帯を構成せず、口唇直下より縄文や撚糸文を施文するものである。施文原体は縄文R L・撚糸文Rを用いるものが多い。口唇の形態は多様であるが、丸頭状を呈するものが多く、外側あるいは内側に肥厚・外反する。

本類は清陵高校遺跡・前原遺跡・北坂遺跡などでわずかに認められる。

4類（10～21） 3類と同様、胴部にのみ縄文や撚糸文を施文するものであるが、縄文を用い



第11図 三角錐形石器に伴出する土器

るものは少ない。1～3類に比べて条間隔が広く、まばらな施文となる。撚糸文は節の細かいものと粗大なものとがあり、いずれもRを主体としている。口唇の形態は3類とあまり変化なく、丸頭状あるいは丸棒状を呈して若干肥厚・外反するものが多い。口唇下に無文部を設けるものがあり、2種に細分される。

a (10～14) : 口唇直下より縄文・撚糸文を施文するもの。

b (15～21) : 口縁部にわずかな無文部を残して撚糸文を施文するもの。

4 a類は前原遺跡では相当量が、また清陵高校遺跡ではわずかに認められる。4 b類は北原遺跡・北三木堂遺跡で主体をなしており、北坂遺跡・前原遺跡などにも少量認められる。

5類 (22～32) 口縁部に凹線あるいは沈線文をめぐらせ、比較的幅の広い無文帶の区画を明瞭にする撚糸文土器である。撚糸文は条間隔が広く節の粗大なRの原体を用いるものが多い。器形は口唇が丸頭状や丸棒状を呈しわざかに肥厚・外反する傾向をもつ。無文帶のあり方から2種に細分される。

a (22～26) : 口縁部に凹線あるいは段差による括れをもつもの。

b (27～32) : 口縁部に一条の沈線文をめぐらせるもの。

本類は前原遺跡で主体をなしており、他に和田遺跡などでわずかに認められる。

6類 (33～49) 口縁部に凹線あるいは沈線文を巡らせる無文土器である。器面は丁寧に研磨されている。2種に細分される。

a (33～38) ; 丸棒状の口縁が肥厚あるいは強く外反するため口縁部に段差が生じ、凹線状の括れをもつものである。

b (39～49) ; 口縁部に一条の沈線文をめぐらせるもの。沈線文はその断面がV字状の浅いものとU字状の深いものとがあり、また、断続的に引かれているものも認められる。器形は口唇が角頭状を呈し、直立あるいは外反ぎみに開口する。

6 a・b類とともに和田・北坂・前原・東山遺跡などに認められるが、前原遺跡を除いた3遺跡では6 b類が主体をなしている。

7類 (50～71) 無文土器を一括した。口唇の形態と器面整形のあり方より5種に細分される。

a (50) : 口唇が外側へ折り返すように肥厚・外反するもの。

b (51～59) : 口唇が丸頭状を呈し内側あるいは外側にわずかに肥厚・外反するもの。

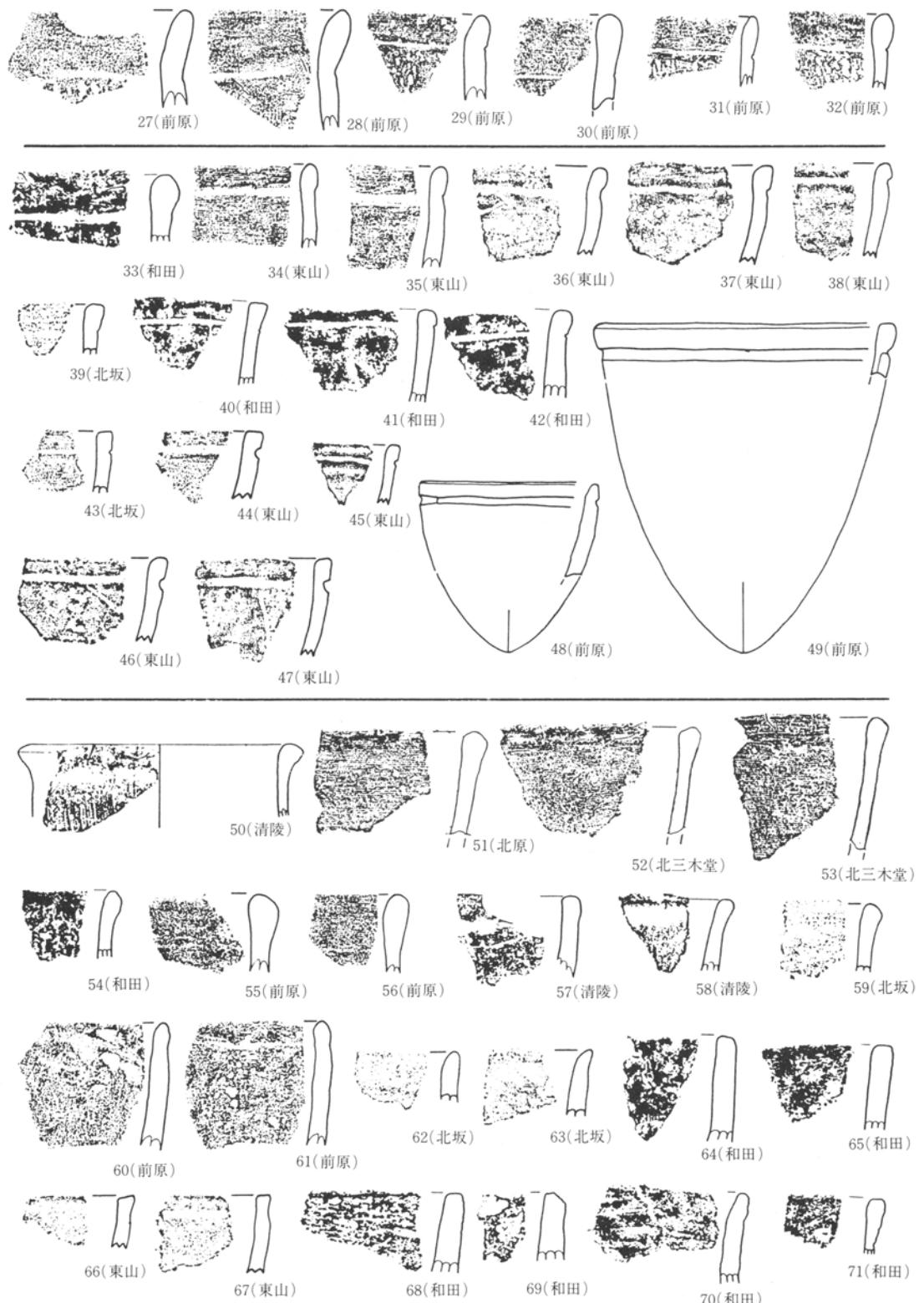
c (60～63) : 口唇が丸棒状や先頭状を呈し、ほとんど肥厚・外反しないもの。

d (64～67) : 口唇が角頭状を呈し、肥厚・外反しないもの。

e (68～71) : d種に類似した口唇形態をもつが、器面にヘラ状工具による縦位あるいは横位の整形痕を明瞭に残すもの。

a種は清陵高校に、b種は清陵高校・北原・北三木堂・和田・前原・北坂遺跡等にc・d種は和田・前原・東山・北坂遺跡に、e種は和田遺跡にそれぞれ認められる。

以上、各遺跡において三角錐形石器に共伴すると判断される土器を抽出して分類してみた。次



第12図 三角錐形石器に伴出する土器

にこれらの土器を編年体系の中に位置づけてみたいが、現在の撚糸文系土器の編年は井草 I 式から夏島式までの前半期についてはほぼ確立しているものの、稻荷台式以降坂式までの後半期については現在でも数多くの論議が行われ確立していない。例えば、夏島・稻荷台式の併行説をはじめとして、稻荷原式の新・古式の細分、稻荷原式・大浦山式と無文土器の坂式をつなぐ「東山式」の提唱やそれを「花輪台II式」とする見解、常総台地を中心とした花輪台 I・II式の分離否定説および花輪台式とは異なった「金堀式」・「石神式」や早期の沈線文土器とをつなぐ「木の根式」の提唱などが論じられているが、型式設定に伴う系統や併行関係の把握およびその名称を含めた型式細分などの点で、第2表の編年対比一覧からも明らかのように今だ未確定の要素を残している。

本論では、残念ながらこれらの編年観を逐一検討して、どういった編年観に立脚してゆくのかを判断するだけの時間的余裕と力量をもち合わせていない。したがって三角錐形石器に伴出する撚糸文土器の比定に関しては、地域的・系統的に詳細な分析を行っている宮崎朝雄・戸田哲也両氏の編年観を念頭に置き、標式遺跡の土器と対比する中で概括的な位置づけを行ってみたい。

まず、縄文を主体とする 1・2・3 類であるが、これらは口唇部・口縁部・胴部の文様帶の変遷過程により説明されるものであり、それぞれ井草 I・井草 II 式・夏島式に比定される。4 a・b 類は原体の節の細かいものと粗大なものとの両者が存在するが、ともに撚りのゆるい浅い施文となり、4 b 類では口縁部の無文化という傾向がうかがえる。こうしたあり方は稻荷台式以降において顕著に認められるものであり、口縁部の無文化傾向をもつ点で 4 b 類がより後出的であるが、4 a 類とともに稻荷台式に比定されよう。5 類は口縁部に凹線や沈線文をめぐらせて無文部を区画する撚糸文土器であるが、b 類の方がそれをより明確にしたものと見えられている。5 a 類は稻荷原遺跡の I 群 2 類に、5 b 類は二宮神社境内遺跡出土例にそれぞれ対比され、ともに「稻

第2表 各説の編年対比一覧

※戸田氏作図（1987）に加筆した

宮崎（1981・1982）				原田（1986）	池田（1984）	戸田（1987）			
南西部 三浦半島・多摩丘陵	中央部 武藏野台地・大宮台地	東部 常総台地					神奈川・東京・埼玉	千葉	
戸田第IV 東正院	新井、鶴ヶ丘C区 實井、西之台B はけうえ、稻荷原	伏見東I群3類 石神4類 中野木新山	稲荷台 木の根I 稻荷台	木の根I 稻荷台	稲荷原新式 花輪台I式 大浦山式	稲荷台式 （口縁直口 施文粗、帯伏）	東京天文台 大丸VII・Ⅷ、世田谷区総合運動場	西ノ城、中野木新山 木の根I-3a、飯山満東	
第I段階						稲荷原古式 （口脣肥厚 （口縁無文帶）	實井I-a 新井 西之台B	稲荷原古段階 I-3、II-1	木の根I-3bの一部 石神4類の一部
大浦山 赤穂原 長坂 藤の台	はけうえ 稻荷原 二宮神社境内	二ツ木向台 西広 花輪台 木の根5類 金堀	稲荷原、花輪台 金	花輪台 系地	稲荷原新式 花輪台I式 大浦山式	實井I-b 大浦山I式	稲荷原新段階 I-2、II-2	石神5類、西広 花輪台1 金堀	
第II段階								木の根I-4・5	
藤の台 平根山 平坂 下高洞	東山 栗原 市場坂	生谷塙 鶴崎・土宇 天矢場 木の根5類	東山 金 石 神	石 木の根II	神 花輪台II式	大浦山II式	藤の台、東山 平根山	花輪台II 博崎	
第III段階									
				平坂、木の根I・II	(+)	平坂式	平坂 下神明、市場坂 稻荷原	二ツ木向台無文 伏見東2類 博崎	
第IV段階									

荷原新式（あるいは稻荷原式新）」段階に比定されよう。6類は無文土器であるが、口縁部と凹線や沈線で区画する点で5類と類似した要素をもっている。特に、6a類は稻荷原遺跡のII群1類と対比されることから5a類と同段階に位置付けられよう。また、6b類は稻荷原I群2類などよりも口縁部無文帯の幅が狭く、より後出的様相をもつ土器として「東山式」あるいは「花輪台II式」とされるものである。7類は口唇形態からみて、それぞれ7a類=1・2類、7b・c類=3・4・5類、7d類=6類と並行関係にあると考えられるが、7e類は擦痕状の整形痕を明瞭に残すことから平坂式に比定されよう。

以上、簡単にではあるが各遺跡出土の撚糸文系土器について編年の位置付けをおこなってみた。それをまとめたのが第3表である。出土土器を数量的に比較すると主体となる時期が認められるが、北原遺跡を除いて各遺跡とも数型式にわたる時間幅を有しており、三角錐形石器がどの段階に伴ったのかは確定できない。しかし、その出現期については清陵高校遺跡例でみると井草I・II式段階にまで遡る可能性を有し、またその存続は和田・東山遺跡例から「東山式・花輪台II式」段階まで確認することができよう。特にその盛期については、清陵高校遺跡を除いた5遺跡のあり方からみても稻荷台式以降の後半期にあることはほぼ確実であろう。こうしたあり方はスタンプ形石器とも類似するものであるが、その出現期については三角錐形石器がスタンプ形石器よりもやや後出的な様相をもつ状況も見うけられる。それは、三角錐形石器を多出する群馬県内の例でみると、夏島式を主体とした撚糸文土器を出土する見立溜井遺跡(3)、諏訪西遺跡(4)等ではスタンプ形石器を伴出するものの、三角錐形石器を全く伴出しないという状況が認められるからである。こうしたことを加味するならば、清陵高校遺跡の三角錐形石器は量的に少ないながらも存在している4類の稻荷台式に伴う可能性もある。また、同遺跡において安定した状態で出土しているスタンプ形石器は、前述の三角錐形石器との関係を考慮すれば井草I・II式段階に伴出する可能性がうかがえるのであり、その出現期についてはこれまで想定されていた稻荷台式段階よりも確実に遡ると思われる。

ともあれ、現段階において確認できるのは、三角錐形石器は後半期に盛期をもち終末期の無文

第3表 各遺跡出土の土器型式一覧 (◎多 ○中 △少)

型式 遺跡	井草I	井草II	夏島	稻荷台	稻荷原古	稻荷原新	東山 花輪台II	平坂
北原				◎				
北三木堂				◎				
和田						○	◎	○
東山						○	○	
北坂				○	○	○	○	
前原	△	△	△	○	○	◎	○	
清陵	◎	◎	○	△				

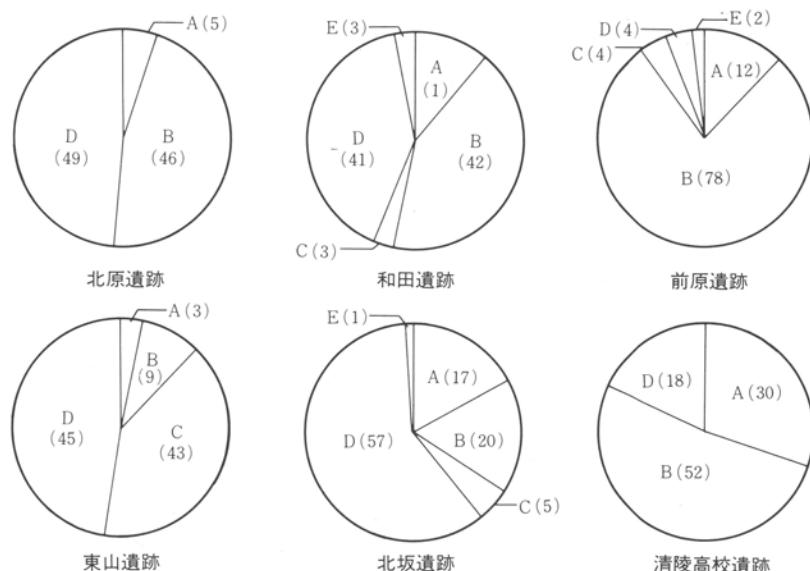
土器群まで存続するということであり、早期以降の土器に伴出するとみられる明確な事例は存在しないようである。⁽⁴⁸⁾

8 三角錐形石器に伴う石器群の組成と地域性

三角錐形石器を含む石器群は、いずれも遺物包含層内より出土したものを基本資料とするためにその多くが時期的に複合し、単位的な石器群を抽出することが難しい。また、これは石器組成を分析する上で指摘されていることでもあるが、遺跡（集落）内で使用・廃棄される石器と遺跡外での使用されることの多い石器とがあり、「その石器のもつ性格によって遺存率に差が生じる」ことを考慮するならば、おのずとその分析も一遺跡全体を単位とした大まかな傾向の把握によら

第4表 各遺跡出土の石器組成一覧

分類	A類			B類				C類	D類				E類	
器種	磨製 (局磨)	礫 斧・打斧	礫 器	三 角 錐	ス タ ン プ	磨石・ 敲石・ 凹石	石 皿	石 鏃	加工痕 ある剝 片器	削 用 片痕 Uあ るF器	剝 用 片痕 Uあ るF器	搔 器	石 錐	砥 石
遺跡														
北原 (Aプロック)	①	①		⑪	⑤	①			③	⑯				
和田	①	⑪	⑤	⑬	⑯	⑤	④	④	⑤	⑦		①	④	
前原	⑯	⑧	③	④	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	②	⑯	②
東山	③	⑨	③	③	⑯	⑦	①	⑯	⑯	⑯	⑯	③	⑯	
北坂	⑨	⑫	⑯	⑦	⑯	⑧	②	⑯	⑯	⑯	⑯	③	⑯	
清陵	⑤	⑯	⑯	②	⑯	⑯	⑨		⑯	⑯	⑯			



第13図 分類別の組成比率

ざるを得ないのが現状である。そこで、ここでは撲糸文系土器に伴う石器群の分析を同様な見地から行なっている宮崎朝雄氏の手法にならい、先の北三木堂遺跡を除いた6遺跡についてその石器組成を分析してみたい。

第4表は各遺跡から出土している石器の組成一覧であるが、さらに各器種を想定される機能よりA・B・C・D・E類にまとめ、各類の組成占有率を表したのが第13図である。この図からも明らかのように群馬県下の場合、北原遺跡ではB類とD類が各々50%近くを占め、これにA類が組成し、和田遺跡ではさらにC類（石鏃）とE類がわずかではあるがこれに加わる。埼玉県の場合、北坂遺跡ではD類が60%近くを占めこれにA・B類が各々20%加わる。前原遺跡は時間的に継続した遺跡であり多量の石器を出土しているが、B類が80%近くを占めこれにA類が10%、C・D類が5%前後加わる。東山遺跡ではC・D類がともに45%程を占めB類が10%、さらにA類がわずかに加わる。栃木県清陵高校遺跡ではB類の50%を主体に、A類が30%、D類が20%加わる。

これらの各遺跡における石器組成の様相について、宮崎氏が設定したA・B・Cの3類型をあてはめてみると、前原・清陵高校は植物加工具のB類を主体としたB型、東山遺跡は狩猟具のC類を主体としたC型となろうが、北原・和田・北坂遺跡の3例はB類と共に切る・削る・搔ぐなどの多機能的加工具のD類が高い比率を占め、宮崎氏の3類型のどれにも合致しないものである。しかし、こうしたD・B類を主体とする石器組成のあり方は、群馬県内では他の後半期の遺跡でも認められるものであり、当地域においてはかなり普遍的な組成として存在していると理解される。つまり、D・B類を主体とする石器組成は新たに“D型”とも言うべき内容を持っており、それが三角錐形石器の中心的な分布域と重複するかのように地域的な組成型として存在しているのである。一方、三角錐形石器の分布が希薄となってスタンプ形石器の分布が優勢となる周辺部地域では、D類が減少してB類やC類を中心としたB・C型の石器組成となる傾向が認められる。これらの周辺部地域がB型やC型をとることについては先の宮崎氏による地域性の分析とも矛盾しないものであり、大宮・常総台地を中心とするC型、多摩丘陵・武藏野台地を中心とするB型との関連で説明し得るであろう。また、三角錐形石器の主体的分布域の石器組成もスタンプ形石器をはじめとしたB類を多出することや、前半期を中心とする清陵高校遺跡例がB型となることなどの点で、前半期にすでにB型の組成をもつ多摩丘陵・武藏野台地の地域との共通性が指摘される。しかし、先の清陵高校遺跡例からみると、B類が主体となるもののD類が20%弱の比較的高い比率を占めており、関東地方北部地域ではこうした前半期のD類の存在が後半期においてより顕在化し、D型の組成型へと漸移的に変化していくものと考えられる。

（石坂）

9 おわりに

以上、三角錐形石器とスタンプ形石器の分析を通して両石器の差異とその石器組成の地域性について論じてみたが、要約すると次のようになる。

① 分析資料より得られる計測値の示すデータは三角錐形石器・スタンプ形石器ともほぼ同様な

傾向を示す。このことは三角錐形石器がスタンプ形石器と同様体部を手で握り、その底面を主機能部として使用された石器であることを示している。

② 三角錐形石は範型的形態のI類およびその周辺的形態のII類からなり、底面部傾斜角が90°前後を示すa類は使用痕の状態からスタンプ形石器に類似する機能が想定されるが、底面部傾斜角が60°前後のb類はスクレーパー的な機能が想定され、各々底面部傾斜角の相違による機能上の分化が認められる。

③ 三角錐形石器は原石の形状を大きく修正する「形状修正」タイプであり、スタンプ形石器は「形状保持」タイプである。また、三角錐形石器には細粒で比較的均質な石器石材（黒色頁岩・硬質砂質頁岩など）が、スタンプ形石器にはこれらに比べ粗粒な石器石材（輝石安山岩・石英閃綠岩など）が用いられ、明確な石器石材選択上の差異が認められる。

④ 三角錐形石器には機能部の欠損と再生が顕著に認められる。

⑤ 三角錐形石器は利根川上流域の丘陵地帯に中心的分布域を形成しているが、その分布圏は狭く、基本的には凡関東的に存在するスタンプ形石器の分布圏内に包括される。

⑥ スタンプ形石器と三角錐形石器は、稻荷台式以降の後半期を最盛期とする点で共通するが、スタンプ形石器は夏島式以前の前半期より存在し、その出現は三角錐形石器よりも若干先行する傾向が認められる。

⑦ 石器組成の面では三角錐形石器は剝片石器を主体とするD型、スタンプ形石器は磨石・凹石・敲石を主体とするB型という傾向が認められる。

こうした両石器の関係を総合的に見れば、三角錐形石器はその一形態であるa類の機能や最盛期などの側面でのみスタンプ形石器と類似するが、他の面では両者は大きく異なっている。特に、三角錐形石器の分布圏においては、その石器組成の中にスタンプ形石器を必ずと言って良いほど具有するということからみても、三角錐形石器が「スタンプ形石器の亜形態」でないことは明らかであり、明確な用途上の区分が存在したと判断される。しかし、こうした差異を越えて両石器の分布がともに撫糸文土器の分布圏に包括され、その出現・消長が撫糸文土器の段階にほぼ限定されることは、スタンプ形石器ばかりでなく三角錐形石器についても撫糸文土器文化に存在する特徴的な石器としての位置付けが可能であろう。

多摩丘陵・武藏野台地の地域では、前段階の押圧縄文系土器の時期に比べてB類を主体とする石器組成や石器総量の増加などの現象が顕著に認められ、その背景には気候の温暖化に伴う植物質食料の繁殖と生産活動の活性化が想定されているが、⁽⁵⁾三角錐形石器やD類を主体とする石器組成に象徴される地域性の登場も、こうした自然環境の好転に伴う生産活動の高揚や多様化と軌を一にしていると考えられ、関東地方北部地域における自然環境に適合した生産活動を反映したものと理解される。ただ、本論で取り上げた分析資料でみる限り、D・B類を主体とする石器組成型と三角錐形石器の分布は関東地方北部地域に偏在し、互いに重複するかのような現象が認められるが、現状ではこうした三角錐形石器という特定の器種と石器組成型とが構造体をなして存在

しているか否かを判断できるだけの資料に乏しく、今後の資料増加をまって再度検討する必要があろう。また、本論では三角錐形石器の用途やD型という石器組成型から導き出される具体的な生産活動の様相に関して論究することができなかつたが、このことについては上記の問題や燃糸文土器文化における地域性の分析とも合わせて、今後における研究課題としておきたい。

(石坂・岩崎)

本稿を草するにあたり、下記の各氏からは種々の御教示と御助言をいただいた。また、昭和村教育委員会からは中棚遺跡の資料を借用させていただいた。文末ながら記して深甚なる感謝の意を表する次第である。

青木秀雄・飯塚 誠・市毛美津子・井上唯雄・内田憲治・大木紳一郎・岡谷英治・鴨志田篤二・瓦吹 堅・黒岩文夫・小島敦子・小島純一・小宮俊久・斎藤弘道・桜岡正信・志村 哲・関塚英一・田口 崇・塚本師也・寺崎裕介・富沢敏弘・長嶋元重・能登 健・藤巻正信・古郡正志・前原 豊・松村和男・宮下健司・若月省吾(50音順。敬称は省略させていただいた。)

註

- (1) 小田静夫 「スタンプ形石器」 『縄文文化の研究』 7 1983年 雄山閣
- (2) 栗原文蔵 「縄文中期に伴う特異な石器」 『若木考古』 第54号 1959年
- (3) 海老原郁雄・福田定信・桜岡正信 「栃木県内発見の凡字形石器」 『考古学ジャーナル』 第173号 1980年
- (4) 海老原郁雄 「原始・古代」 『上河内村史上巻』 1986年
- (5) 西井幸雄 「3. スタンプ形石器について」 『前原遺跡』 1983年 宮代町教育委員会
- (6) 黒岩文夫 「第3節中棚遺跡出土の石器」 『中棚遺跡・長井坂城址』 1985年 昭和村教育委員会
- (7) 石坂 茂 「4 成果と問題点」 『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』 1986年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (8) 註1に同じ。
- (9) 註7に同じ。
- (10) 「荒砥北三木堂遺跡」 『年報』 1 1982年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (11) 「荒砥天之宮遺跡」 1981年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (12) 石器底面部は傾斜する場合が多く図上測定では正確な面積が求められないため、傾斜角を修正することにより計測をおこなった。計測はプランメーター (PLANIX7) を用い、3回計測の平均値を使用した。
- (13) 青木秀雄・西井幸雄・秋山幸治・松村和男 『前原遺跡』 1983年 宮代町教育委員会
形態上の特徴から、第182図2・3、第183図1~3・7、第184図1・3、第185図、第186図1・2が三角錐形石器I類に、第181図3・5、第183図4~6、第184図2・4、第186図3、第188図2が三角錐形石器II類に分類される。
- (14) 石塚久則・大木紳一郎・坂井 隆 「三室B遺跡」 『年報』 2 1982年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
当遺跡では、「東山式・花輪台II式」段階の燃糸文系土器とともに多量の剥片石器や三角錐形石器・スタンプ形石器・磨石・敲石・石皿・石鏃などが検出されている。大木紳一郎氏の御教示による。
- (15) 註1の文献に詳細な分析データが示されている。
- (16) 水村孝行・増田逸朗・中島 宏 『清水谷・安光寺・北坂』 1981年 大宮市教育委員会
- (17) 宮崎朝雄・水村孝行・駒宮史朗・横川好富 『甘粕山』 1980年 埼玉県教育委員会
- (18) 斎藤 弘・海老原郁雄・鎧木理広 『宇都宮市清陵高校地内遺跡調査報告書』 1986年 栃木県文化振興事業団
- (19) 例え砂岩は粒径の相違により5段階に区分され、これに変質の相違が付加される多様性に富む岩石である。石器の製作者は経験にもとづき石材を選択する際にはこのような相違を敏感に感じ取っていたと思われる。石器器種と石器石材の関係を把握しようとする場合、特に砂岩などのように多種多様な石器石材に用いられる岩石には、ここで指摘するような相違を踏まえ記載する必要があろう。
- (20) 黒色頁岩は母岩別資料の分類が困難な石材であるために大きく2つにしか分類できない。従って各類中には複数の母岩別資料が存在することになるが、それにも拘わらず剥片剥離工程上の初期に作出される大形剥片のみが削器や加工痕・使用痕ある剥片の素材として用いられている。
- (21) 荒砥北原・北三木堂遺跡では三角錐形石器の製作に伴って生じる剥片は副次的に使用される可能性のあることを示している。また、埼玉県東山遺跡や北坂遺跡でも三角錐形石器(東山遺跡では石核に分類された12点のうち図28の1・3・11は三角錐形石器のII類に、北坂遺跡では21点の礫器のうち図84-3、図89-37・38・39、図105-196、図108-220・221は三

角錐形石器Ⅰ類に分類される。)とともに多量の剥片石器を伴出しているが、その詳細な状況については不明確であり、直接比較することはできない。三角錐形石器の形状作出と目的的剥片の作出が共存するのか否か、あるいは、地域的な相違がみられるのか否かについては今後検討すべき課題である。

- (22) 荒砥北原・北三木堂遺跡出土の三角錐形石器には、少なくとも工程上の初期的様相(荒割り)は認められず、製品として搬入→使用→(欠損)→再生→最終的な廃棄という過程が想定される。出土資料には第7図(5~9)に示す特徴的な剥片が多く存在し、三角錐形石器底面部に接合する事例も確認されている。現在のところ三角錐形石器の側面部に接合する資料はなく底面部に接合する資料に限られることやこれらの特徴的な剥片は複剥離面より構成され、底面部の一部(5~6)あるいは底面部・側縁部の一部(7~8・9)とみられることなどからその多くは再生剥片として把えられる。
- 一般に、石器の再生は製作時あるいは使用時に欠損が生じた場合や使用過程で弱まった機能を回復する必要が生じた場合におこなわれるが、三角錐形石器の底面部(主機能部)は複剥離面より構成され意図的に凹凸を作り出して機能部としていることから上記の剥片は、衰弱した機能を回復するための再生加工の存在を示す可能性がある。
- なお、同様な資料は北坂遺跡(第88図3)や前原遺跡(第187図3・5・7)にも認められる。
- (23) 西井幸雄氏は三角錐形石器が「スタンプ形石器の亜形態」として包括される可能性を示唆している。しかし、そで示された三角錐形石器およびスタンプ形石器の諸形態は分類基準が曖昧であり充分ではない。通常、スタンプ形石器に施される側縁整形は小田氏が指摘しているように剥離痕および打撃痕からなり表裏両面に施されることが多く、三角錐形石器に施される側縁整形とは相違する。同氏は側縁整形の相違あるいは機能部(報文では、打割面と称する)の相違を踏まえずに器種認定をおこなっており、また、器体の中央付近での欠損を欠損として把えられていない。このため両石器は互いに類似する様相を示すことになり、「スタンプ形石器の亜形態」という評価・認識にたたれたものと推察される。
- (24) 新潟県内の三角錐形石器の分布については、荒砥北原遺跡の報文中では南蒲原郡下田村五十嵐神社出土例を取り上げたが、その後寺崎裕介氏より出土地不明との御教示を得ており、今回は除外してある。
- (25) 神奈川県天神森遺跡(岡本孝之・他:1983)では、打製石斧の一種として扱われている資料の中に三角錐形石器に類似したもののが3点(第254図247~249)存在している。実測図だけでは判定し難いが、これが三角錐形石器であるとすれば神奈川県内でも唯一例であり、また現時点での南限を示す例と言える。
- (26) 石坂茂「八木沢清水遺跡」1978年 小野上村教育委員会
- (27) 前橋市教育委員会の前原 豊氏の御教示による。
- (28) 若月省吾「和田遺跡」1981年 笠懸村教育委員会
- (29) 註5に同じ。
- (30) 分布の粗密によって単純にその中心的地域を認定することは少々問題を含んでいる。なぜなら、それは遺跡(資料)発見の契機となる開発の進捗の度合いが各地域によって異なっているからである。燃糸文土器の段階における遺跡分布は、丘陵地帯に偏在する傾向にあることが最近の調査事例や分布調査等からも伺うことができるが、開発の進んでいる多摩丘陵や武藏野台地などで顕著に認められるスタンプ形石器の分布の密集化傾向については、こうした当該期遺跡の立地傾向も考慮する必要があろう。現に、群馬県でも丘陵部の開発の進捗に伴いスタンプ形石器の出土例が26遺跡で確認されており、今後更にその事例は増加すると考えられる。しかし、三角錐形石器については開発の進んでいる多摩丘陵・武藏野台地には全くと言って良いほど認められず、現段階での分布傾向は今後においても殆ど変わらないであろう。
- (31) 岡本孝之「稲荷台文化の展開(一)・(二)」『古代文化』第24巻第1・2号 1972年
- (32) 白石浩之「第IV節 南横浜バイパスNo.4遺跡」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』5 1973年 神奈川県教育委員会
- (33) 宮崎朝雄「燃糸文土器」『縄文文化の研究』3 1982年 雄山閣
- (34) 戸田哲也「縄文土器の型式学的研究と編年(中編)」『神奈川考古』第23号 1987年
- (35) 原田昌幸「燃糸文土器終末期の諸問題(Ⅰ)・(Ⅱ)」『物質文化』第46・48号 1986・1987年
- (36) 註34に同じ。
- (37) 註31に同じ。
- (38) 庄司克・堀越正行「松戸市二ツ木向台遺跡における早期縄文式土器の研究」『史館』第3号 1974年
- (39) 鈴木道之助「花輪台式土器とその終末」『史館』第10号 1978年
- (40) 篠原正「金堀遺跡発掘調査概報」1977年 富里村史編さん委員会
- (41) 池田大助「北総台地における沈線文土器群の出現 一木の根I式及びII式の提唱」『研究紀要』8 1984年 千葉県文化財センター
- (42) 註33・34に同じ。
- (43) 三友国五郎・安岡路洋「稲荷原」1966年 大宮市教育委員会
- (44) 加藤晋平・土井義夫・河野重義・塩野半十郎「秋川市二宮神社境内の遺跡」1974年 秋川市教育委員会
- (45) 参考資料として取り上げた荒砥北三木堂遺跡では、燃糸文土器のほかに前期の黒浜式や諸磯式の土器が混在しているが、こうした結果からみれば三角錐形石器はほぼ単純に出土している4b類の稲荷台式土器に共伴したと判断される。
- (46) 『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』1985年 赤城村教育委員会
- (47) 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』1986年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (48) 三角錐形石器の存続時期に関しては、前期の羽状縄文土器群にまでともなうとする黒岩文夫氏の見解(註6の文献)や、中期に盛期をもつとする海老原氏らの見解(註3・4の文献)もある。しかし、黒岩氏がその論拠とした中棚遺跡の層位的な共伴関係の中には時期の異なる遺物の混在現象が認められるし、また海老原氏が論拠とする資料の多くは表採品であ

り、発掘資料とされるものも前述の諸遺跡の事例に比べ単発的で混入と判断される余地を充分に残しており、これらの資料によって時間的な位置付けを行うには無理がある。両者の見解に少なからず問題があることは、中棚遺跡の北側200mに隣接する前期の黒浜式から諸磯C式期にかけての98軒の住居を検出した糸井宮前遺跡（関根慎二・他：1986）において、また赤城山南麓末端の丘陵に立地する中期の勝坂式から後期の堀之内式にかけての300軒以上の住居を検出した三原田遺跡（現在、遺物篇刊行に向けて整理が進行中であり、担当の小宮俊久氏より御教示を得た）において、それぞれ三角錐形石器が全く伴出していないということからも明らかであろう。

- (49) 小林康男 「組成論」 『縄文文化の研究』 7 1983年 雄山閣
- (50) 宮崎朝雄 「燃糸文文化の石器について」 『奈和』 第19号 1981年
- (51) 各遺跡における器種別分類およびその出土数量については、基本的に報告書の記述に従っているが、一部については再分類を行ない、明らかに時期的に異なるものが混在している場合にはカウントから除外している。特に、三角錐形石器については註21でもふれたが、礫器・石核などとして分類されているものが多く、本稿では三角錐形石器として再分類している。
- 清陵高校遺跡の場合、スタンプ形石器に分類された第59図134と第60図144は三角錐形石器（II a類）に分類される。北原遺跡については、本稿を起こすにあたり削器として一括したものを加工痕ある剝片・使用痕ある剝片に改めて分類し直しており、報告書の記載と若干異なっている。また、和田遺跡については報文中に総量の記載がなされていないが、報告者の若月省吾氏からIV層中より燃糸文系土器に伴って出土した石器のうち実測および分類可能なものは総て掲載しているとの御教示をえており、掲載資料数がほぼ実数に近いと判断される。
- (52) 註40に同じ。
- (53) 三室B遺跡でもD類が組成の主体を占めている。註14に同じ。
- (54) D類の削器などの剝片石器はC類の石鎌とともに燃糸文土器文化の前半期より存在するものであるが、特に後半期の関東地方北東部を中心として増加する傾向がみられることから押型文土器文化の影響という視点より説明されてきている。こうした考え方からD型という石器組成も押型文土器文化との関連で説明できるのであろうが、果たしてそうした理解は正しいのであろうか。先述したように、分析資料として扱った石器組成が当時の実態を直接的に反映しているか否かはとりあえず置くとして、基本的に石器組成の差異は種々の生産活動の差異を反映していると理解されるものである。たとえ押型文土器やその分布圏に特徴的な局部磨製石鎌・逆Y字形鎌等の伴出が認められたとしても、それは同一型式の伝播・共有という「社会的行動様式」（堀越正行：1973）の側面より把握されるべき性格のものであり、押型文土器文化の石器組成との類似性は、それとは別次元の「生業経済的行動様式」の共通性という観点より検討されるべきであろう。言いかえるならば、土器型式の分布に現れた「文化圏」と石器組成とは基本的に一致するものではなく、石器組成に認められる類似性は各地域における自然環境に適合した生産活動のあり方の類似性を示すものと考えられる。それは後半期の燃糸文土器文化において、D類を主体とする石器組成型の分布とB類を主体とする組成型の分布が、その中心的地域を越えて存在しているにもかかわらず、土器型式に認められる様相は両地域ともに稻荷台式→稻荷原式→「東山式・花輪台II式」という変遷を示し、ほぼ共通したあり方を示していることからも明らかであろう。
- (55) 今村啓爾 「第V章 総括」 『東京天文台構内遺跡』 1983年 東京天文台構内遺跡調査団

参考文献

- 岡本 勇 「相模・平坂貝塚」 『駿台史学』 3 1953年
- 芹沢長介 「関東及び中部地方における無土器文化の終末と発生に関する予察」 『駿台史学』 4 1954年
- 芹沢長介 「神奈川県大丸遺跡の研究」 『駿台史学』 7 1956年
- 小林達雄 「第4章 縄文早期前半に関する問題」 『多摩ニュータウン遺跡調査報告II』 1966年 多摩ニュータウン遺跡調査会
- 堀越正行 「土器型式の事象と論理——その相対的側面——」 『史館』 創刊号 1973年
- 小林達雄 「タイポロジー」 『日本の旧石器文化』 1 1975年 雄山閣
- 谷井 彪 『鶴ヶ丘』 1978年 埼玉県教育委員会
- 井口直司 「第4節 燃糸文土器群の分布の特徴にみる下里本邑遺跡の位置づけ」 『下里本邑遺跡』 1982年 下里本邑遺跡 調査団
- 戸田哲也 「縄文時代草創期後半の堅穴住居について」 『大和市史研究』 9 1983年
- 岡本孝之・鈴木次郎 「早川天神森遺跡」 1983年 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 小葉一夫 「縄文時代早期後半における石器群の様相——南関東地方を中心に——」 『研究論集』 II 1983年 東京都埋蔵文化財センター
- 中東耕二・飯島静男 「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材——黒色頁岩と黒色安山岩——」 『群馬県立歴史博物館年報』 第5号 1983年
- 斎藤幸恵 「第6章 押型文系土器文化の石器群とその性格」 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 1987年 岡谷市教育委員会
- 関根慎二・谷藤保彦・石塚久則 「糸井宮前遺跡II」 1987年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ※ 第10図の三角錐形石器とスタンプ形石器の分布図中で取り上げた各遺跡の参考文献については紙数の都合上、割愛させていただいた。